

第2部 設立 50 周年に寄せて

1. 将来の夢

高校時代、自分の将来について「形あるものを永く残せる土木工事をしたい」と決めていました。具体的にはその大きさから「ダム工事」が頭にありました。その第一段階が、大学の土木工学科に進学することでした。

2. 何故、佐賀大学の土木工学科を目指したのか

佐賀大学の入学試験要領がとてもユニークで、全国でも有数の「傾斜配点」を採用していました。1200点満点中、数学が400点、理科が200点で、社会は世界史が指定と記憶しています。私にはこの条件がドンピシャとヒットしました。お陰で無事合格できましたが、実はこの時点では土木工学科の新設は認可されておらず、土木工学科を目指す同志は他の学科での仮受験(私は物理学科)でした。ちなみに、もし土木工学科が認可されなければ、入学を辞退し、その後の人生が不本意な形になっていたと思います。

3. 土木工学科入学

私の学生番号は「70T-401」です。この番号が佐賀大学での4年間の始まりでした。70は1970年入学を、T(技術)は理工学部を、4は土木工学科を、そして01は学生番号です。同期の**跡部**君より名簿順が先だったためですが、実はこの1番が卒業までものを言いました。

ある講師の先生から「諸君は誇らしい1期生である。その中でも1番の赤嶺君は土木工学科のメンツにかけ留年させる訳にはいかない」との免罪符をいただきました。(実はいただいたつもりです)

4. 学生生活

当時、佐賀大学は学生運動の最中で、そのような中、私も例にもれずマージャンと酒で学生時代を謳歌していました。

当たり前のことですが、1期生に先輩はいません。我が学び舎も影さえない状況でした。九州各地から集まった仲間と共に新たな歴史を作っていくしかなかったのです。特に高校から一緒に就職後も同じダム現場で仕事をした**足立**(佐藤)君、試験のたびに

お世話になった牛谷、家永両君、年長で頼りになった吉村君、独特の雰囲気の方光武君、探検部でも一緒に活躍した石井(中村)君を中心とした東京楠志会のメンバー大場君、鈴木君、早田君、そして故松本君。

このような仲間と家族を交えた親交がいまだに続いているのが私にとっては魔法のような佐賀大学での4年間で人生の宝です。

5. 卒業後

鬼塚先生の土質研究室を経て、第一希望のダムで有名な前田建設工業(株)に入社しました。入社後、希望の長野のダム現場に配属されました。当時、弊社ではダム現場が事業の柱であり創業の礎であったため、土木職員が憧れる特別な部署(本店直轄)でした。その後も全国各地でフィルダム(鬼塚研究室が影響)を作り続け、気が付いたら社内で1番のダム施工実績者となっていました。現場の第一線を後輩に任せたのち、それまで培った大規模事業の経験をかかわれ「新潟地震の復興」「東日本大震災の復興」に携わりました。

社内での思い出の一つに、海外視察時に後輩の諫山明生君(平成2年卒)に会いました。彼は、当時茨城でダム現場の責任者の私に「どうしても前田に入社したいので過去問を教えてください」と電話をくれました。その後、優秀な彼は無事入社し、今も現場でもの造りに励んでいます。

65歳からは、長い単身赴任から解放され、山梨の自宅から愛妻と毎日富士山を眺めています。今後は、不在中お世話になった地域に貢献しようと思っています。

6. 今、想うこと

古希が近づき、自分の人生を振り返りますと、佐賀大学の4年間がその後の生きる方向を示してくれた最も濃厚な期間であったと思います。その期間を共有し、培っていた仲間たちに多謝。

土木技術者として、今までで最も記憶に残った業務
ー北アフリカ・アルジェリアでのダム工事ー

家永清

私が入学した、1970年は学生運動（70年安保）が最高の盛り上がりを見せた年で、学内には至る所に看板が立てられ、壁にはビラが貼られ、あちこちで集会が開かれ、勉強どころではありませんでした。学内の風景も今とは全く異なる様相を呈していました。そして大学4年の秋、バブル期にあった日本経済は中東の原油価格の暴騰（オイルショック）により大きな被害を受け、その後の就職戦線にも暗い影を落としました。業種によっては、内定取り消し等発生した中で、運よく私が就職できたのは、当時、東京の神具外苑・北青山に本店を構える、株式会社間（ハザマ）組でした。土木工事の名門として名が通り、佐久間ダム、黒四ダム等のダム工事に定評がありました。最初の配属先は本店・技術本部・研究開発局の土質材料研究室で主にロックフィルダム工事現場での施工を技術援助・補佐する部署でした。

具体的な業務内容は、①設計段階でのフィルダム材料の調査試験とその使用にあたっての評価 ②実際に使用するフィルダム材料の施工前の盛立試験とその結果を基にした施工仕様（施工及び品質管理基準）の決定で、ここでの経験が、後の海外のダム工事で役に立つこととなりました。

そして、1986年、35歳の時のことです。当時、私は、長崎県松浦市の港湾工事の現場に勤務していました。ある日現場から戻ってくると、いきなり所長室に呼ばれました。そこには、所長と工事課長のいつもの違う表情があり、嫌な予感がしました。予感は見事に的中しました。思いもよらぬ、アフリカ・アルジェリアの「ガルガルダム建設工事」現場への転勤を告げられました。アルジェリアと聞いてまず頭に浮かぶのは、歌謡曲「カスバの女」の一節「ここは地の果てアルジェリア、どうせカスバの夜に咲く・・・」です。それ以外には「北アフリカ」「サハラ砂漠」「アルジェの戦い」くらいの知識しかありません。そのダム工事は、日本国内では評価の高い方が現場の指揮をとっているのに、うまくいっていないという噂も耳にしていました。話を聞いた途端、一瞬目の前が真っ暗になりました。

当時、建設業界は業績拡大の目的で、その活路を海外に求めていました。人事の面でも、将来、幹部に成るためには、海外工事の経験が必要とされていました。海外と言っても、その大半が「開発途上国」で占められ、治安が悪く、生活環境も良く無いはずでした。そのような状況下にあっても、海外勤務の話が来れば、断ろうと心に決めていました。海外赴任の場合にはまず、本人の意思確認が必要となるのです。所長はそのことを知っていながら「期間が残り工期6か月と短いこと」と「常務からの直接の電話」だから断れないと言うのです。すぐに私は、「断れないのなら、いっそのこと辞めてしまおう」と思い、再就職口がないか、あちこち当たってみました。限られた時間の中では限界がありました。

そんな私の背中を押してくれたのは「女房でした。「お父さん、とりあえず行ってみたら」の一言。「女は強いなあ」と改めて感じました。それと、もう一つ、大きな不安がありました。通常、海外に赴任する前には、語学の研修があるのですが、今回の場合は、状況から判断して、そんな余裕は無いはずですが。アルジェリアは元フランスの植民地で、フランス語が公用語のはずです。私はフランス語が話せないため、会社はその旨を相談しました。会社からは、「現地には優秀な通訳がいるから心配しなくても大丈夫」という返事が返ってきました。

旅立ちの日は、見送り、同伴者もなく、フランス航空（パリ行）で、不安を抱えながらも、一人寂しく成田空港を後にしました。当時、ヨーロッパ直行便は数が少なく、大半がアラスカのアンカレッジ経由でした。

17時間かけて、翌朝、パリのシャルル・ドゴール空港に到着しました。でかい空港です。日中、観光バスツアーで、パリ市内を観光しました。その後、オペラ座近くで、日本の「地産」が経営するホテル「モンタ・ボー」に泊まりました。そして、翌朝、市内にもう一つある「オルリー空港」からアルジェリアへと向かいました。

アルジェリアは、アフリカ大陸北部に位置し、北は地中海に面し、温暖な地中海式気候、南はサハラ砂漠で、人口4千万人の大半が北に集中しています。首都は「アルジェ」です。社会主義体制で、平均年齢が20歳代という若者の多い国ですが、職探しの若者が町は溢れています。宗教は「イスラム教」です。何をしても「アラーの神は絶大なり」で不定期に集団でお祈りをします。余談になりますが、ここで、イスラム教について、知らない方多いと思いますので、その一部を紹介します。私がイスラムの世界の面白いところは、物を盗んでも盗む人は悪くなく、盗まれる方が悪い」となるので、自分の大事なものは、自分で守らなければなりません。また、弁当も全員が持ってくるわけではなく、持っていない人は、持ってきた人のところへ行って勝手に食べ始めます。食べられる方も決して文句を言いません。田舎の方は、未だに女性がマスクで顔を隠しています。美人の多い地方で、特に魅惑的な目が印象的でした。女性の外出には制約があるため、昼間は男と子供だけの殺風景な町でした。1年に一度、ラマダン（断食月）というのがあり、この一月間、昼間だけ水以外の食べ物を一切口にすることができません。また、年に一度「羊祭り」というのがあり、この日は一家に一頭、羊を丸焼きにして食べます。何の楽しみもない生活の中にも非常にラッキーなことがありました。イスラムは本来「禁酒」のはずなのですが、この国では「ビール」と「ワイン」が飲めるのです。植民地時代の設備が残っていたのです。飲まずにはいられないこの世界で、アラーの神も最後に粋な計らいをしてくれたのだと思います。

アルジェ空港では通訳の人が迎えに来てくれたので、それまでの緊張感は少し軽減し、無事現場に着くことができました。現場に着くと所長が迎えてくれて、“元気そうだな。最後までよろしく頼むよ”と言われました。所長は社内ではベテランのダム屋として知られていました。現場に案内されて驚きました。工事の遅れが一目瞭然で、“これでは6か月では終わらないな”と更に不安が募りました。

また入札時の調査不足により、堤体材料（ショルダー材）の大幅な不足も明らかになりました。工程遅延の要因について挙げられるのは、第一に社会主義体制とイスラム教が原因となっている生産性の低さです。第二に、旧ソ連の技術者の工事妨害があったことです。彼は自分の存在価値を守るために、結果の悪そうなところの試験をやらせ、度々再施工を要求しました。再三現場退去を申し入れしましたが、当局も旧ソ連との関係があり、うまくいきませんでした。工事の終盤には姿を見せなくなりました。現場で彼と目が合うと、「モン・アミ（私の友達）」と言って不適な笑顔で近寄ってきて握手を求めてきました。今でもその彼の顔を忘れることはありません。第三に社会主義体制独特の通関の難しさがありました。故障した重機械やダンプトラックの部品が手に入らず、モータープールは稼働できない重機械の「墓場」とかしていました。きない機械であふれていました。第四に堤体材料の不足が発覚し、設計会社であるポルトガルのコバ社と協議を行いました。コバ社はこのダムでの3社目の設計会社でしたが、問題に退すら対応が素早く、施工を止めないように努力してくれました。

他に材料は見当たらないため、ダムサイトにある石灰岩の使用の検討を行うことになりました。ここからが私の出番です。世界中で石灰岩を使った例はあまりないので、アルジェにある大学の研究室を借りて材料の力学（三軸圧縮）試験をメインに材料調査試験行いました。その結果、石灰岩の使用の目途が立ちました最後に工程の遅れを回復する切り札としてとった手段は、かつて間組がマレーシアでダムを造った時に養成したマレーシア人のメカニックやドライバーをワーキングビザを取得して、応援に連れてきたことです。彼らは短期間で家族に仕送りをするために、昼夜を問わずよく働いてくれました。その結果、工程の遅れを大幅に改善することができました。

施工中はつらく苦しい思いの連続で、着任してすぐの頃は、毎日のように日本に帰った夢を見ました。何で自分はこんな連中を相手に、こんな連中のために、自分を犠牲にしてまで働くひつようがあるのか？と悩みました。でも、人間って良くできていると思いました。時間が経過するとともに、嫌な思い出は風化していき、良かったことや楽しかったことばかりが思い出として残ってあいるのです。仕事を終えて、誰かの部屋で酒を飲みながら、語り合ったこと、サハラ砂漠旅行等。

工事も終盤に差し掛かった時、工事の設計変更額が当初契約額の10%を超えたため、工事を打ち切る権利をえました。所長は職員全員を集めて意見を聞こうとしましたが、誰からも意見はでませんでした。そこで、所長は自らの判断で「どうせ赤字を計上するのなら、最後までやりぬこう」と全員に伝えました。今、振り返ってみて、その決断は正しかったと思います。

社会貢献みたいなダム工事ではありましたが、アフリカの大地に「地図に残る仕事」を成し遂げたという事実は深く私の胸に刻まれています。

以上が私の体験した中で一番記憶に残る業務ですが、その中で得たものは、どんな苦しい状況においても、努力すれば何とか道を拓くことができるということです。以後、“何とか

なる”が私の口癖になっています。

追記：

<ガルガルダム (BARRAGE DU GARGAR) >

アルジェリア民主人民共和国水資源環境森林漁業省全国ダム局が、地中海から内陸に 60 km 入ったアトラス山脈の麓、ルリザン県ウエッドリュウ市東方 5 km にかんがい、洪水調節、上水道、発電等を目的に建設した中央コア型アースフィル（ダム軸アーチ）の多目的ダム。工事は 1983 年 12 月 31 日に着工命令を受け、1984 年 4 月にダム本体工事に着手、1988 年 11 月に本体盛立を完了、その後 1988 年 11 月 12 日に湛水を開始。

（ダムの主要諸元）

形式：中央コア型アースフィルダム

堤高： 90 m

堤頂長：400 m

堤体積：4 百万 m³

貯水容量： 4, 5 億 m³



断捨離して乗り越えろ

土木工学科 1 回生 石井(旧姓:中村) 誠吾

今から 50 年前の 1970 年、私は国立佐賀大学の理工学部土木工学科を受験した。驚いたことに、合格の日、土木工学科は存在しなかった。しかも籍を置いたのが機械工学科だったことに、2 度びっくり！

まもなく学生生活が始まり、『先輩は居ない』『先生は新入り』と我がまま勝手仕放題の生活は、実に心地良い。

こんなに居心地が良いのに、僅か 4 年で出ていくなんて！親が許せばもっと学びたい！一生ここで過ごしたい！の願いが叶う筈もなく卒業して、関西に本社の在る建設会社へ就職。そこから社会人の生活は始まった。

振り返ると、土木工学科の誕生から 50 年。その間 2 度のオイルショックにバブルの崩壊。そこに阪神淡路大震災とリーマンショックが襲いかかりそして東日本大震災が追い討ちを掛ける。幾多の荒波と時代の波に翻弄されながら、よくぞここまで辿り着いたものだ。ところが、よりによって設立 50 年という節目の年の 2020 年。100 年に一度とも言われる感染症のパンデミックが人類を脅かす。これまでの常識や生活様式に突然の方向転換が強いられ、企業や大学に、変革と多様性が急がれる。

私に変革と称し断捨離で業態転換を計ったのは、今から少し前の頃だった。地方の建設会社の一人娘だった女房とは、家業を継がず駆け落ちし、二人して出雲大社で式を挙げた。不義理な結婚だったので家業は継がないが、名は残すと自らの姓を捨て、女房の姓を名乗ることにした。これが私の断捨離の始まりだった。

やがて女房の姓で長男が生まれ、石井家にとって名実ともに真の後継者が誕生した時、婚姻は許された。その後、訳あって家業を継ぎ、女房の両親と一緒に暮らしが始まった頃、バブルが崩壊した。

迫り来る時代の荒波を業態転換で乗り越えることに決意した私は、何十年と続いてきた会社の大黒柱を取り外し、細くて向きの異なる三つの柱を建てることにした。細い方がしなりがあるが折れにくい。時代の荒波で折れたとしても、残った柱で、又、建て直せば良いとの思いだった。しかし、業態転換が容易ではないことは明白で、しがらみも有り、断捨離するしかなかった。

断捨離とは捨てること。

物を捨て！『幾年も使い込んできた道具。未だ使える建設機械やトラック。』

人を捨て！『先代の時代から苦楽を共にしてきた社員や東北の出稼ぎの人々』

最後に自分を捨て！『学んできたことや経験してきたこと』

これらのすべてを捨てるには、ただひたすら前を向き、何を言われようとも振り返らない覚悟が必要だった。断捨離の時の心の痛みと起業する時の生みの苦しみ、これが私の実体験で

す。

三つの柱で乗り越え感じたことは、『断捨離して、乗り越えろ！木々が秋に葉を落とすみたいに！』

土木工学科設立 50 周年に寄せて Once upon a time

福岡市西区在住 1 回生（昭和 49 年 3 月卒） 牛谷 逸朗

Once upon a time それは、くりいむしちゅーの上田が MC を務めるクイズ番組で渡辺満里奈がクイズ界の帝王カズレーザを早押しで押し勝ち正解した答えであった。

Once upon a time・・・まだ、国立大学が一期校、二期校にグループ化されていた時代に、一期校合格発表の午後に担任で数学の教師でもあった〇〇先生から一期校不合格を告げられてから、佐賀大学へのドラマが始まる。師曰く、『牛谷、二期校はどうするんか』と。我答えて曰く、『佐賀大学に土木工学科が新設になるらしい。数学の配点もいいので、佐賀大学を受験します』と。師曰く、『それはいい。いい選択だ』と。そうせいと背中を押されたものの、受験のためのホテルも宿も分からないところに、卒業生が出て空き部屋になっているところを大学だったか、生協だったかが紹介するシステムがあったので、早速申し込みをした。受け入れ先は、水藻で緑色に染まったクリークの横に居を構える、土地持ち、金持ちの農家の夫婦が営む 8 部屋続きの長屋の 1 室であった。その親父さんが気さくな人で、受験会場が、高校生の娘が通っている高校なのであとで道案内するねと言われ、受験会場を前日には下見できた。おかげで今度は実力通りの結果が出せ、第一志望：土木工学科、第二志望：〇〇学科の合格通知を手になっている。しかし、その後に土木工学科新設は順当に認可され、〇〇学科の話はその後全くと言って良いほどなかった。その頃の大学は、まだ、70 年安保闘争の余波で教養部の前にはバリケードが張られ、履修表の掲示板を探すのにどこから校舎に入るのかさえも戸惑う感じであった。

『70T405』これが私の学籍番号であるが、1 回生ということで上からの圧力制圧もないので、皆それぞれに伸び伸びと豪快な個性派そろいで、楽しいことが数多あった。例えば、教養部のとある時に、代返をし、担当教官から人数が合わんと再度出欠を確認されるも、敢えてまた代返をするので、あきれ返って不問にしてくれた教官もいた（現在であれば、動画等の確認で即アウトの結果が出るのであろう）。そんな中で本を読むことの面白さ楽しさを教えてくれる友が居て、ジャンルを限定せず、できるだけ数多く読むことを心掛けた。これは速読の訓練になり、その後の私の人生に大いに役立つこととなる。専門課程に入ってから、講義内容を良く理解していなかったのか、ノートの板書も斑模様であったので、試験前には学友のノートをコピーしまくり、仲間と徹夜で勉強をした。（今風なら、デジカメもしくは携帯でパシャリ、もしくはデータ入手の一言だろうけど）そして試験当日は自信たっぷりに、全てが理解できたかのように試験に臨み、それで『及第点』が貰えたのは、先生方の温情か、それとも団結力による学習効果の賜物か。はたまた、アドレナリンの一時的上昇による記憶力・問題解決力の増長か。なお、このアドレナリンの上昇現象は、その後の資格試験の受験の際にも度々覚醒し、これまた大いに役立ってきた。4 年の時は、卒研で学校に泊まり込み、実験の合間に交代で雀卓を囲む生活でもあった。そう言いながらも、友情と団結と一掴みの自己肯定力のおかげで無事卒業が出来た。

社会人になってからも、結婚式に招待され、招待し、その後の今も、家族ぐるみで旅行も楽しめる素晴らしき仲間恵まれた佐賀大学土木工学科は私にとって最高傑作である。COVID-19 の影響で、今は移動が制限され窮屈な思いをしているが、ワクチン接種を我々世代も含めて大半が受けた暁には、集団免疫効果が確認出来るはずだ。その時はまた、仲間と酒を酌み交わそう。万歳、佐賀大学理工学部土木工学科。

佐賀大学の4年間の出来事が、その後の人生で、大きなインパクトとなった事を思い出しながら書いてみます。

昭和46年4月に入学したころの土木工学科の周辺の様子は、造成地にボツンと3階建ての土木棟があり、付属して実験棟が1棟あったことを記憶しています。

南部バイパスは、水田の中を工事中で、ボックスカルバートだけがいやに目立っていたことを思い出します。

2回生として入学し、佐賀大学土木工学科の歴史をこれから私たちが造るのだと、希望に燃えていました。1回生しかいない、歴史がない、縛られるものは何もない、よってのびのびとした大学生活を送りました。

就職先を決める時、大学周辺のインフラ整備の状況を見ていましたので、発注者として関与したいと公務員に決めました。

しかし、社会人となって先輩がいないことで相当苦労しました。他大学の同窓会が開催されるのを聞くにつけ、羨ましかったものです。そのため人脈作りに励みました。まず誘われた宴会には、絶対に参加することを心掛けました。その結果技術系・事務系にかかわらず太い人脈ができ、その後の人生（出世？）に大いに役に立ちました。今では私が県庁佐賀大同窓会の最長老として後輩の世話をする立場になっています。

また、当時は学生運動が地方に飛び火し、佐賀大学でも他大学からの運動家が校内で活動し、建物封鎖等をしていました。その様な中、警察機動隊が校内に入り、指揮棒を持った隊長の指示で、ジュラルミン盾を持った隊員がバリケードを撤去し、座り込みをしていた学生を排除していきました。土木工学科の学生はノンポリが大多数でした。私は学生運動を1度は経験をしてみたいと、建国記念日制定反対に同調し、佐嘉神社前で座り込みをしました。左右の学生とがっちりスクラムを組み、座り込みをしましたが、機動隊員にあっさり排除されました。隊員の顔は、大学生は勉強しろと言わんばかりに私をにらみつけていたことを忘れません。その反動かもしれませんが、県庁ではストライキ等には参加しない、反対の人生を送ってきました。またこの建国記念日が、私の結婚記念日になろうとは、当時は全く予想もつきませんでした。

入学当時の年間授業料は、月額1000円で、年間12000円だったと記憶しています。翌年から3倍に値上げするとの方針がでて、これには反対だと授業をボイコットしたように記憶しています。実のところ在学生には影響がなかったのですが、後輩の為値上げに反対運動をしたものでした。当時の大学授業料が高校より安かったと記憶しています。私のようなサラリーマン家庭では、授業料が安いことは大変ありがたかったものです。

また当時帰省する前日、1000円は必ず確保していました。九大線乗車賃720円+急行券200円+バス代70円で、佐賀から大分の自宅まで帰ることができました。1000円

という数字を見るたび、当時の授業料と帰省の交通費が思い出されます。いまだに財布の中に1000円札が入っていると、何となく安心します。忘れられない金額です。

学生にとって食事はとても大事でした。70円の昼食カレーが大好きで、仕送りがあった翌日は、先ず1か月分の昼食券を確保したものです。2年生から卒業するまでは、朝・夕の食事つき下宿生活をしました。人生で初めてサバの刺身を食べたのですが、食あたりでジンマシンが出て大変でした。体調が悪かったのでしょうか、私1人が当たりました。

社会人となり、2度食べましたが、やはり発病し病院のお世話になりました。

全国ブランドの関サバの産地に住んでいますが、その後サバ刺しは、36年間全く食べていません。あの時サバにあたらなければ、おいしく食べることができるのにと、残念でなりません。その代わりトラふぐ刺しを食べています。

今年は69歳の年になりますが、私の人生においてわずか4年間の学生生活を送った佐賀の地は、前述のような出来事あり、その後の人生において大きな影響を与えた時間でした。

当時の同級生が数人他界し、非常に残念ですが、いまだに家族ぐるみの交流を続けている同級生もいます。佐賀は食材が豊富ですから、呼子のイカや太良のカキを食べに夫婦で行っています。

今後も健康に留意し、佐賀大学との縁を大事にしてゆきたいと思っています。

佐賀大学入学、卒業、現役時代そして今

学籍番号：71 T 412 岡田 隆治

物書きは苦手な私に突然、清田氏から、「土木工学科設立50周年記念誌への執筆」の依頼が来て参りましたが、思いつくままに書かせていただきます。

1971年に佐賀大学理工学部土木工学科 第2回生として入学し、「ホテル竜頭園」でのオリエンテーションに始まり、あっという間の4年間、そして卒後式、どこでやったかな？オリエンテーションのことは少し覚えています、卒業式のことはほぼ記憶にありません。佐賀大学から唐津まで、夜間ハイクと言うのもありました。学園祭の時、怖いお兄さんが来たこともありました。佐賀大学での4年間は、生涯の仲間にも出会え、よい思い出です。

卒業後、西松建設株式会社に入社して退職まで35年、土木技術者として誇りをもって仕事に取り組んできました。その中でも『第二名神高速道路 鈴鹿トンネル上り線工事』の先進導坑(直径5.0m)掘削施工時に使用されたTBM(トンネルボーリングマシン)で月進行886mの日本記録を樹立したことは、誇れる施工だと思います。当時TBMは、長距離トンネルの先進導坑掘削、避難坑掘削に盛んに利用されていました。(現在ではあまり施工されていないようですが)そもそもTBM工法とは、トンネル施工の山岳工法で岩盤掘削に使用され、切羽が自立していることが条件です。尺取虫の様な動きで前に進みます。(「グリッパ」と呼ばれる突っ張り棒のような棒を地山に押し当て、それを反力にとってジャッキで押し、マシンを前に押していきます。)切削された掘削ずりは、連続ベルコンにより坑外迄搬出されます。最近ではNATM工法でも連続ベルコンがよく使用されています。

TBM掘削で、高速施工を実現させるためには、いかにTBMの稼働率を上げるかにかかっています。

具体的には、下記に示す要因が考えられます。

- ・ローラーカッタの寿命を延ばし、かつ効率的に交換する。
- ・連続ベルコンの延伸作業を短時間で終わらせる。
- ・前方の地山を予測し、事前に対処する。
- ・掘削を止めずに、計画通りの掘削ができているかを測量する。



直径5.0mTBM

TBM坑内(左:連続バルコン)

日本のTBM施工において、地山が複雑な日本の山岳では不向きかもしれません。切羽が自立せず、掘削不能に陥ったTBMも何例もあります。私も『第二名神高速道路 栗東トンネル上り線西工事』において、不良地山に遭遇し、切羽改良等で約2ヶ月掘削がストップした経験があります。幸いに「鈴鹿トンネル上り線工事」は比較的地山が安定したことも記録が達成された要因の一つであると思います。仕事の話はこれくらいにしておきます。

さて、佐賀大学を卒業して、官庁、コンサルタンツ、ゼネコン、大学にと様々な職種に就職し、現役時代は時として施主、施工者の立場で会うこともあります。建前上は対等な立場ですが、「請負」の言葉が示す通り「^{うけお}請け^い負^け」という現実があります。これは少々気まずい思いをします。しかし、現役からも退き、立場も関係なしに昔の仲間に出会えると、なんと嬉しいことか。第2回生の同窓会で会う仲間は昔のままです。タイムスリップしたようです。

また、7年前くらいから大学同窓の4人で「四人会」なるものを作り、毎年、夫婦同伴(ここがミソです)で日本のどこかで会い、一泊を共にしています。今までに、「長崎」「琴平温泉」「秋田」「北陸」「北海道」「下呂温泉」と回っています。去年は、コロナの影響で外出の自粛があり、計画が中止となりましたが、一日も早くコロナが終息して、また4人8組が元気な姿で会えることを祈っています。最後に、大学で得た友人は私の大事な宝物で、今も大切にしています。大学は勉強や研究をする場であるとともに友人をつくる貴重な場であることを忘れないでほしいと思います。

パーキンソン病に翻弄された研究人生

71T416 清田 勝

お好み焼きを食べに行ったとき、青海苔がうまく振れないので何だか変だなと思いました。右手がこれまでと違ってスムーズに動かないのを感じるようになり、身体の中で何かが起こっていると不安になり、大学の近くの福田脳神経外科で MRI 検査を受けましたが脳に異常はないということでした。つぎに、佐賀県立病院好生館で診察を受けました。頸椎に問題がありそうだとということでレントゲンを撮りましたが異常はありませんでした。結局、手足に違和感を覚えながら、何もせずに 1 年が経過しました。症状がひどくなってきたので、再度県立病院好生館に診察を受けに行き、意外にも神経内科で受診することになりました。これまでの経過を話している途中で、「ちょっと歩いて下さい」と言われたので歩いたら、「これはパーキンソン病ですね」とはじめて言われました。病名を聞いたことはありましたが難病とは知りませんでした。大変ショックでした。私の人生は終わったなと思いました。家内や娘二人もショックを受けたに違いありません。しかし、私がくよくよしたり、やけを起こしたら周りを悲しませるだけだと考え、悲観的にならないように極力心がけました。テニスも相手に申し訳ないと思いながらも続けました。これがリハビリとして機能したことは間違いありません。

ようやく病名がわかり治療が始まりました。薬はドーパミンの不足を補うための薬(ドパコール) 1 種類でした。量を増やしたときは病気が治ったように感じますが、時間が経つと効かなくなるのでまた量を増やすというやり方は適切ではないと思いました。不安な日々を送っていた時に、鍼治療でパーキンソン病が治ったという話が飛び込んできました。担当医の治療法に疑問を持っていたので、東洋医学に賭けることにし週 1 回の鍼治療を 1 年間続けましたが改善しませんでした。

福岡に優秀なパーキンソン病の専門医(島先生)がおられることを聞いていましたが、外科手術が専門なので行きたくなかったのです。しかし、手術することも覚悟して島先生を訪ねました。

島先生が最初に言われたことは「なぜもっと早く来なかったんだ、初期の段階だったら簡単に進行を遅らせることができたのに、・・・」でした。薬を見せたら、「このような飲み方はオーソドックスではない」と言われ、大事なポイントを 3 つ挙げられました。①ドパコールだけを飲み続けたら薬がだんだん効かなくなるので、できるだけドパコールを増やさないようにしなければならない。②ドーパミンを作る黒質が何らかの理由で破壊されて不足しているので、黒質以外の場所を活性化させてドーパミンを作るように促す必要がある。③ドーパミンを補充するドパコールの吸収率は低く(1%ぐらい)脳まで届かないのでその値を 5~6%に高める(逃げないようにブロックする)ことが必要である。この話を聞いて、先生によってこんなにも違うのかと驚くとともに、島先生について行こうと決めました。島先生にお会いしたことで気分が楽になりました。

パーキンソン病といっても個人によって症状が異なるので、同じ薬では対応できません。個

人に合う薬を探さなければなりません。私の場合は、基本となるパターンから始めて薬を少しずつ替えて症状の変化を見ながら薬の種類と量を調整する作業を1週間ごとに繰り返し、2か月後に適正な薬の調合が決まりました。薬が決まったときには驚くほど症状が改善していました。この状態がそのまま続けばいいのですが、だんだん症状が悪くなり、薬が少しずつ増えていきます。一つの状態をどれだけ長く持たせるかが最も大きな課題でした。

少しの油断や無理が症状を悪化させます。特に足が動かなくなり、そのたびにドパコールを少しずつ増やしてきました。還暦を迎えるころは最悪の状態でした。幻聴や眩惑が起こり、もう大学を辞めるしかないと思うところまで追いつめられました。ちょっと無理して仕事を抱え込んだのがいけなかったようです。自分の処理能力をはるかに超えた状態に陥り、大きなストレスが掛かり続けました。そのためにこれまでとれていたバランスが崩れ、幻覚を引き起こすメネシットが過剰に反応したことがわかりました。この薬を減らしてしばらくして一瞬ですが、周りの景色がパッと明るくなって今までとは違う世界にいるような気がしました。しかし、減らした分身体の動きが悪くなりました。そこで、ドパコールを50mg増やすことで何とか窮地から脱出することができました。

失敗を繰り返しながら、今も細々と研究を続けています。しかし、この研究が私の足かせになっています。論文や研究助成等の締切りが近くなると眠れなくなり、体調が悪くなります。仕事のスピードが遅いので十分時間を確保したつもりでも最期は徹夜で仕上げることになり体調が途端に悪くなります。体調が悪くなるとわかっていてもやめられません。アルコール依存症やパチンコ依存症に近い研究依存症かもしれません。若いころは研究を早くやめたいと思っていましたが、いつの間にか一番好きで楽しいものになってしまいました。テレビはほとんど見なくなり、リハビリのためのテニスとカラオケの時間を除くほとんどの時間を研究に当てていました。しかし、論文を書くために無理をしたので、今では好きなテニスができなくなりました。研究は楽しく、張り合いがあるので気持ちを活性化させるプラス効果がある反面、期限が決まっていることが多いので無理をしてしまいパーキンソン病を悪化させてしまいます。締切り等がなく自分のペースでできる研究なら両立することが可能かもしれませんが、研究を継続するか、辞めるか決断をしなければなりません。

最後に、学生として6年間(学部4年間、大学院2年間)在学し、さらに教員として35年間本学の教育と研究に関わってこれたことは大変幸せでした。特に卒業研究や特別研究で学生とお酒を飲みながら一緒に議論したことは私にとって一番楽しい時間だったかもしれません。これまで沢山の方に大変お世話になりました。ここに感謝の意を表するとともに佐賀大学のますますの発展をお祈り申し上げます。

合格の知らせ：アルバムに一通の電報が貼られていた。日付が昭和 46 年 4 月 1 日となっているその電報は、佐賀大学合格を伝えるものだった。もう一年頑張らねばと考え出した時であっただけに新年度初日の朗報に大変うれしく思ったことを記憶している。

大学 4 年間：1 年の夏には九州を 2 年の夏には北海道を主にヒッチハイクで旅をした。北海道に向かう埼玉では乗せて頂いただけでなく旅の資金を私の手に握らせた大工の棟梁、庭を借りてテント泊の予定がお客様用の布団で泊めて頂いた函館のお寺など多くの人の温かさに出会った。佐賀に戻りお礼に佐賀の銘菓を送ったものだ。さらに翌 3 年夏の現場実習はなぜか北海道庁旭川土木現業所で、2 年連続北海道に行くことになった。実習で行った時の休日に 100 名山の旭岳(標高 2291m)に登ることもできた。

卒業研究は佐藤清さん、江藤芳武さんと共に渡辺訓甫先生に御指導頂いた。屋外の水路で河床波の形成について調べ研究するものであったが、論文作成の苦労もさることながら、炎天下で河床に用いる材料をフルイにかける作業や河床勾配を均一にならず装置作りに合板ベニヤと悪戦苦闘した大工作業が思い出される。

高校卒業前に仲間と大学進学後の部活についての会話で、『何かやるけど生傷絶えないラグビーだけは・・・』と答えたが、なぜかそのラグビー部に入り卒業まで FW 最前列を務め、キャプテンとしてチームまとめた。今振り返れば“One for all All for one”の精神で一丸となりプレーした事が卒業後社会人生活においても我知らず生かされていた。7 名の同期は卒業後 15 年目を機に佐賀で集まり、以来 5 年毎を原則に同期会を催している。土木同期同様、ラグビー部の仲間は何ものにも代え難い終生の友である。

卒業して：昭和 50 年日本道路公団に入社。名古屋建設局浜名バイパス工事事務所(以下(工))に配属され、53 年 5 月同局企画調査課、55 年 7 月同局岐阜(工)と同局管内で約 8 年間勤務し、一般有料道路、高速道路の計画、建設に携わった。特に有料道路事業の仕組み、工事最盛期に積算・発注、変更、精算が重なる忙しさに身を置いた体験は、その後の公団人生の原点となっている。

本社建設第 3 課を経て 61 年 2 月から 6 年間を新潟建設局工務課と同局上越(工)に勤務する。前半の 3 年間は北陸道全通“チャレンジ 63”の実現に向け局で現場のバックアップに努めた。後半 3 年間は上越(工)で上信越道の調査・建設に携わる。現場は妙高山麓の 14 km 区間で半年近く雪に覆われ積雪深は 2m にも及ぶところだ。事業初期時点の地元とのトラブルは、完成まで約 10 年は要する事業の成否に大きく影響を及ぼすものであり、測量業者には口酸っぱく注意していた。当地は別荘地もあり多くの地区外地権者もいて、考えられる手を尽くして接触し事業進捗を図っていたが、手違いで説明前に幅杭を入れてしまい、了解が得られる筈もなく降積った 2 m の雪を人力で掘り杭を抜取ったこともあった。勿論春になり現地立会して了解を得て、ほっとしたものの苦い思い出だ。

福岡建設局大分(工)には平成 8 年 2 月から 2 年半勤務した。赴任早々 3 月には隣の日田(工)で進めていた玖珠~湯布院間が開通して九州 7 県都が高速道路で繋がった頃だった。大分(工)でも、同年 11 月に大分道終点の大分米良まで開通し大分道が全線開通した。その後は宮崎に向けて続く東九州道大分~佐伯間の工事及び佐伯~蒲江間の調査を順次進めた。

静岡建設局清水(工)には平成 10 年 8 月から 12 年 6 月末まで勤務した。新東名の清水市区間と中部横断道静岡県区間を所掌していた。新東名は車線数往復 6 車線、設計速度 120km/h を用いているが伊勢原市から豊田市間では 140km/h を担保する構造となっている。このため既に仕上がっている先行土工工事やトンネル区間では直前まで担当してきた東九州道の現場とはその規模の違いに圧倒されるものがあった。例えばトンネル断面積は東九州道の約 80 m²対して新東名では約 200 m²と 2.5 倍も広いものだ。また縦断勾配が 2%以下であるため長大切土のり面、高盛土、高橋脚にならざるを得ない。ただ、この平坦で緩やかな線形、広く余裕ある空間は安全・快適に走行できるに違いないと確信した。現在では 6 車線化事業が完了した令和 2 年 12 月 22 日から 120km/h に引き上げられている。

平成 15 年 7 月に異動した九州支社では、九州道で最後に残った 4 車線化工事が加久藤トンネルで進められ、長崎道でも最後の区間長崎~長崎多良見間が全通に向けて現場が動いていた頃だった。共に平成 16 年に完成している。一方で、東九州道では福岡・中津・大分・宮崎・鹿児島事務所で鋭意建設を進めた。大分(工)勤務の頃から目標としていた“チャレンジ大分国体”も平成 20 年 6 月の津久見~佐伯間の開通で実現した。

今思うこと：九州の西側を通る九州道は平成 7 年に全通し、同 16 年には全線 4 車線以上で完成している。一方で東側を通る東九州道は昭和 62 年に国幹道に追加指定された路線であり遅れは否めないものの、平成 28 年 4 月椎田南~豊前間の開通によって多くの区間が暫定 2 車線で、また新直轄、一般国道自動車専用道路等も混在しているが、やっと北九州市~宮崎市間が直結した。その結果、宮崎道・九州道を経由して鹿児島市とも繋がったが、ごく近い将来に東九州道の残る宮崎市~鹿児島市間の開通及び全線 4 車線化完成を望んでやまない。叶うことなら全通の折には自分で運転してみたいと思っている。

佐賀大学理工学部理工学科の更なる発展を願う。

□はじめに

まずはじめに、大学を卒業してから現在までの私の経歴から説明します。

私は佐賀大学理工学部土木工学科の2期生です。1971(昭和46)年入学ですからもう50年経ちました。時の経つのははやいものです・・・

私事ですが、1975年(昭和50年)に大学を卒業し、これまで3回転職しました。ゼネコン(A)→ゼネコン(B)→建設コンサルタント(C)→地方自治体(D)です。今は嘱託というか非常勤というか地方自治体(D)に勤めて4年目になりました。1年毎の更新です。総合建設業いわゆるゼネコンに就職し30年間勤務し、3年間違うゼネコンに転職し、次に建設コンサルタントで10年間働きました。そして現在非常勤で地方自治体に勤務して4年目になります。

これまでの長い46年間を振り返るとPC(プレストレストコンクリート)橋の世界にどっぷり浸かり過ぎてきたなあという印象です。ほとんど設計(桁橋が一番多く、アーチ橋や斜張橋にも携わって来ました。)の世界で過ごしてきた感じです。また、本州四国連絡橋公団「尾道・今治ルート」の生口橋にもかかわってきました。この46年間における記憶の中で一番記憶に残る出来事と言えば、1995(平成7)年1月17日5時46分に発生した「阪神淡路大震災」です。マグニチュード7.3、最大震度7、直下型の地震で6437人の犠牲者が出ました。損害額は約30兆円といわれています。淡路海峡大橋の設置ケーソン基礎が1mずれた記憶も残っています。

□阪神淡路大震災の記憶

当時ゼネコンに勤めていた私(東京都江東区在住)は、1995年の2月1日から約4ヶ月半の6月中旬まで現地(兵庫県尼崎市)に赴任し、緊急復旧工事に従事しました。我々の会社は鉄道や道路など数多くの被災物の復旧工事を担当しましたが、その中で私は日本道路公団(現ネクスコ西日本)の「名神高速道路守部高架橋」の緊急復旧工事に従事しました。対象物件は、構造形式が「RC5径間連続中空床板橋」の橋梁で、私は設計担当として現場に赴任しました。

まず、被災地に行って感じたことは目にゴミが入りゴロゴロして「どうも落ち着かなく気持ちが悪いなあ!」ということでした。実は震災から2週間経過していたにも拘らず粉じんが浮遊していてそれが目に入り、目が気持ちが悪かったのを記憶しています。

被災を受けた現場を見るとビルの被災・倒壊、橋梁の落橋や崩壊、橋脚の座屈破壊、家屋の倒壊などなど・・・それはそれは酷い現実がそこにあり、自然の怖さというか自分の非力さを痛感し、頭

を叩かれた気がしました。「俺に何が出来るんだろう？」と自問しました。

現場環境の影響で復旧工事は 17 時か 17 時半までしか稼働できずそのあとは事務所での内業となりました。事情が事情だけに施主(道路公団)との打合せは夕方からが多かったような記憶があります。今後の補強補修工事の方針を決定しながら工事を進めるというまさに綱渡りというか手探りの状況下での工事となりました。

宿舎は、会社の資材置き場に簡易のハウスを建ててそこに 50 名を超える社員が寝泊まりをして建築担当(ビルの再構築・補修補強)や土木担当(鉄道・道路)、もっと詳しく言えばJR、阪急、阪神、京阪などの鉄道担当や道路公団、阪神高速道路公団などの道路担当の社員が寝泊まりをして復旧工事に従事しました。工事途中での転勤となり、竣工までは現場にはいませんでしたが、この工事で得た経験はその後の私には非常に影響を与えてくれたと思います。震災以降は「謙虚に謙虚に」を心(肝)に銘じて計算書に向き合っています。

□もう一つの記憶(「1995 年 3 月 20 日」という日)

この時期にはもう一つ忘れられない出来事として、いわゆる「オウムによる地下鉄サリン事件」がありました。忘れもしませんが 3 月 20 日に地下鉄の駅に有毒ガスのサリンをばらまいて多数の犠牲者を発生させた事件です。私は復旧工事のため尼崎の現場にいましたが、当日は娘の中学校(東京)の卒業式の日で関西の尼崎からテレビから流れる東京の救助の映像を観て戦慄を覚え気をもんだ記憶があります。

発生から26年目を迎えた「阪神大震災」のあった1995年は、公私ともに忘れられない年であり、いつまでも忘れてはいけない年となっています。







創設 2 年目の土木工学科に入学したのが土木との関わりであるが、私学と受験科目似ていたためか、受験時の応募者数が非常に多かったことを思い出した。何故、土木を目指したのだろうかと考えると、「黒部の太陽」という映画と後に非難される”田中角栄の日本列島改造論“の影響を受けていたように思う。入学時はどのような内容の授業があり、将来の仕事も考えもせず、佐賀での学生生活を始めたが、山登りやお酒・読書で充実した 4 年間であった。教養から学部に進んでも不勉強な学生生活は続き、何とか 4 年で卒業・就職したが、その後退職するまでの 40 年余りは、学生時の勉強不足に悩まされる毎日であったように思う。就職したのは、最近敬遠されがちな建設関連業の地質(地盤)調査を主とする会社で、同期や先輩社員を見ても理学系の学科を修了した人が多く、土木(工学)を専攻した自分は希少であったが、仕事が官公庁からの受注業務であり、経験の少ない自分でもプロ集団の一部と見られる業界であった。

入社後の最初の赴任地は仙台で九州より出たことのない自分は、東北での言葉や生活習慣の違いになれるのが大変であった。しかし、東北でその後ずっと付き合う、水と関わる機会を得たように思う。初めての機会は、日本の工業化の一翼を担う「新全総」の青森県のむつ小川原開発にかかわることで、日本でも比較的大きな面積の{小川原湖}の水を、工業用水として利用する計画に伴うものであった。{小川原湖}は汽水湖で、平時に太平洋に流出する高瀬川を締切り淡水化して工業用水として利用する計画であった。湖水の利用による水位低下で、太平洋からの海水による湖水の塩水化や周囲の軟弱地盤の地盤沈下について、対策計画シミュレーションをしたことを思い出す。地下水を土質力学で勉強した記憶もなく、密度流や自重圧密沈下について苦労して勉強したが、その後、有機溶剤による地下水汚染解析などに非常に役に立つこととなった。

その後、むつ小川原の広大な台地部には工場ではなく巨大な石油備蓄基地が計画され、N 値の小さい砂質土(15 以下)に遭遇しタンク基礎の選定に苦労するが、地下水位が低くかなりの深さまで不飽和であったため、液状化対策の地盤改良の不要を提言し、工費の低減に寄与したことは貴重な経験となった。しかし、大規模な造成による改変 30 年後に訪問した時、防油堤や地下水が確認されなかった地域で、水が浸出していたことには驚くと同時に予測の難しさを痛感した。

仙台での 6 年間の後は、関東や関西地方で退職するまで各地を移動したが、比較的大きなプロジェクト(開発のみでなく大規模災害)に係わることが出来て貴重な経験を積むことができた。地域特有の土に触り、先に記した水との関連性を挙げると①洪水時の堤体内の水位変化、②閑空の沈下、③廃棄物に起因する地下水汚染等があり、勤務時の最後に苦労した東北地方の大震災時の津波被害も水に係わるものであった。

最近は定年延長が多く企業で実施されつつあるが、私も 10 年位前定年を迎える直前に

使用人から経営者になり、業績に責任を要求されるようになり日常の業績と将来の展望を示す立場になった。地盤調査も 3 次元表示を求められることが多くなり、点から 3 次元表示に拡張するためには物理探査の活用が一つの課題であり、自社でもこれらの開発に努めていた。しかし、より早く実現するために海外の大学と提携するという方針が決まり、そのためオランダの大学に職員を派遣することとなった。提携・派遣を決めるための打ち合わせ時に、専門領域は留学する予定の職員に任せ、提携・派遣の意義を伝えるに際して明治初期の日本の近代化におけるオランダの役割をプレゼンすることにした。日本人の留学生も多い大学であるため、先方は聞き飽きたことかも知れないが、砂防施設や運河、直轄河川の堤防等に係わった経験から少しの知識もあったので、この方針で臨み提携は実現することになった。日本におけるお雇い外国人のオランダ人は、デルフト出身者が多くファン・ドールン、エッセルの業績が日本の近代化に大きく寄与しており、エッセルやデ・レイケは治水の基本形と残している。特に、デ・レイケは有明海に流入する筑後川に導流堤を残し制水している。これから時間に制約もされず、のんびりと各地の土木遺産を見学して歩きたいと計画している。

40 数年の会社員時の経験や学んだものの一部を記したが、土木工学は広く一人で習得することは難しいが、一人一人が専門性を高めてそれらを束ねる力をつけることが土木技術者の目標である。土木工学を専攻した学生も OB も、社会資本の整備や維持管理に係わりつつ、持続可能な社会の実現を目指して研究・業績に邁進して頂きたい。

はじめに

土木工学科設立 50 周年おめでとうございます。

令和 3 年は、私もちょうど 70 歳を迎えることから、人生を振り返り徒然なるままに筆を執った次第です。目を通して頂ければ幸いです。

土木工学科が絶滅危惧種

今、土木工学科は環境総合や開発工学とかに名称変更して、この土木工学科の名称が今や絶滅危惧種となっています。土木工学科という学科名称が存在している国立大学は信州大学のみ。私大は日大や芝浦工大などは頑なに名称を残しているようです。残さざるを得ないという解釈が実は正解なのです。日大では土木工学科の名称を変更しようとしたところ、OB 諸先輩から猛烈な大ブーイングが起こったそうです。土木が細分化され専門化されたことも十分承知していますが、母校の学科名称が消えることは悲しいことです。30 数年前土木業界は 3K（きつい、汚い、給料が安い）といわれ、土木の人气が落ち、受験生を増やすための対策として今どき風の名称変更へ舵を切ったとの推測はたぶん正解なのでしょう。今思えば大学運営が厳しくなった頃と一致するわけです。それにしても土木というロマンチックな名前は永遠に残してもらいたいと切に願う次第です。

佐賀大学大土木工学科への愛着

私は大学卒業後に東京の小さなゼネコンに入社。入社早々に上司から「駅弁大学の土木か。がんばれよ。」といわれました。（都道府県に 1 校ある国立大学のことらしい。駅弁を売ってる県庁所在地のことも）佐大土木の力量が試されると感じました。また同時に次の年も新卒が入社できるように良い評価を受けなければならないという先輩の使命感も生まれました。何せ新しい大学なので当然です。学生時代にはまともに授業も出ず遊びほうけていたから、おそらく同輩らは笑うかもしれないが、毎日が勉強、日々努力と頑張り続けてきたように思います。佐大の後輩がその後入社してくるとどうしてもその評価が気になっていましたが、会社での良い評判を聞くにつれ、うれしくなったことを思い出します。また同期についても各々の企業・職場で出世・活躍されている話を耳にする度にやっぱりみんな優秀なんだと改めて思ったりもしたものです。

土木技術者としての誇り

シビルエンジニアは幅広い知見や経験が必要なのは周知のことではありますが、土木一般の基礎的な知見・スキルに加え、あらゆるインフラ関連・地域環境の特性や関係地元住民との高い折衝能力が求められ、これらは経年的に積み重ねられて気がつけば大きな財産と

なっていったとおもいます。おそらく皆様も同じおもいで今頷いてくれていることとおもいます。課題に直面した際には「兎に角会話して、前へ前へ、何とかなるという信念で」克服してきたようにおもいます。これが今まさに自信と誇りです。

後述の転機で触れますが、前職が倒産した際にも、蓄積された知的財産がこの身に有る以上は何とかなるという信念は変わりませんでした。

おそらく今後も様々な問題が公私にわたって発生するでしょうが乗り切っていけると信じています。シビルエンジニア万歳！

転機

これは私の人生において触れておくべきことで手前みそですが、ご容赦ください。体力が無い小さな会社の悲劇でした。建設業界が一気に不景気になった時期でした。ポツポツと数社のゼネコンの倒産を耳にしていたころ、まさかうちの会社が……。前職ゼネコンの倒産は今から 20 数年前でした。しかし今までの経験を生かして「施工管理業務」で充分食っていけると自負しておりました。が、想定していた報酬条件には程遠く、生活の糧を失い、失望のどん底を味わいました。かつて仕事で知り合った関係の建設会社数社から「うちの会社に来ないか」との誘いも頂きましたが、また倒産するかもと思いお断りした次第でした。1 年間熟考の結果、ここを分岐点として、建設業界から環境業界へとトラバースしました。この時期はちょうど環境ビジネスが謳歌されだした頃で、私はもともと環境・自然保全には興味があったし、これからのホットな産業界という認識が一挙に膨らんだことが一番の理由でした。

だが環境業界も幅広く、化学の知識も、生態系の知識も新卒並みでは不安との戦いでしたが、しかしながら『細心にして細心』の環境分析業界からしてみれば、『大胆にして細心』な泥臭い土木屋の私に興味津々だったようです。新規の業務に拒絶反応を見せる業界でしたから、「なんでもこいや！」の私にはシビルエンジニアの血が脈々と流れていたわけです。

おわりに

64 歳になって現職（環境）の単身赴任が終了した折に、突然関東地区の同期（＝71T）から 3～4 人の飲み会に誘われてから 5 年が経過しました。久しぶりの再会でしたが、みんな一線を退いていて、悠々自適な雰囲気でした。今や年 3 回ほど上野の安い居酒屋での飲み会が楽しみになっています。利害関係がなくタイムトリップできる楽しみはなんともいいようなない至福のときでした。酒はほんと弱くなっていますが年相応でちょうどいいやと自画自賛しています。

最近、人生 100 歳とか言われています。まだまだ、健康に留意して、同窓同期と懇親を継続しながら、楽しみたいとおもっています。佐賀や九州から関東に上京した際には+one（どうぞご連絡を）で是非飲みたいと思います。

今やこの歳になり、土木半分環境半分の人生となりましたが、まだまだ「なんでもこいや！」でガッパッテ行きます。

最後に、これからも母校の発展を陰ながら、いや、先頭に立って応援し続けます。
佐大からノーベル賞を！
草々。

「50年前の学生時代を思い出して」

1973年入学（第4回卒）

佐賀東部管工事（協） 大串哲也

佐賀大学理工学部土木工学科設立50周年を迎えるにあたり誠にありがとうございます。現在、楠志会の会長を仰せつかっておりますが、昨年来のコロナの影響で同窓会活動がほとんどできていないことをこの場を借りてお詫び申し上げます。

50年前の記憶を辿りながら当時の大学の事を思い出してみます。

入学当時は、教養部、経済学部、教育学部、農学部と理工学部の5つのメイン建物しかなかったと思います。北側の正門より入りメイン通りの突き当りには生協があり、その南に木造2階建ての不知火寮が肅々と建っていました。土木工学科棟（現在の理工学部3号棟）は、正門からは一番遠い通称南バイの北側にありましたので、車の騒音対策で教室に冷房設備が完備されていました。この時代に冷房付とは驚きです。50年前ののどかな大学というイメージです。しかし学内の雰囲気は学生運動の名残が残っていて、「○×派」や「□×派」などの看板があちこちに見られ、ヘルメットをかぶった学生が歩いていた記憶があります。ちょうど私の入学年度からの授業料値上げに反対する学生集会が大講義室で開かれ、そこに機動隊が突入したということもありました。高校生から大学生になって環境も大きく変わったと感じました。

さて、学生の本分である授業について思い出してみると、1～2年次は教養部で必須科目及び一般教養科目の単位を取得して2年次後期から専攻学科に進むことができたますが、記憶では8単位以上落としたら専攻学科に進むことができないシステムだったと思います。サークルの先輩に教えて貰いながら、取得し易い教科を選択しました。しかし、安全バイであった一般教養科目の「哲学」を受講したほとんどの学生が全滅に近い結果となりました。また、必須科目の取得困難な「物理」に手こずり、同期入学の土木工学科40名の内、教養部を脱出できたのは13名でした。運よく私も13名の中に入ることができました。1つ下の5回生には急に学生が増えてご迷惑をお掛けしました。専攻学科に入ってから、少人数の授業なので先生との距離も近く感じました。研究室は構造研にらせていただき、荒牧先生、古賀先生には大変お世話になり無事卒業できました。卒業論文の実験に有明粘土が必要だったので、土木校舎の回りを研究室の仲間と汗まみれになりながらスコップで1m以上掘った事を思い出します。無事卒論研究発表会を終えて祝杯を挙げました。3人でお銚子30本、よく飲みました。

卒業の見込みがついたところで就活です。当時は、オイルショックの影響で大手ゼネコンからの募集はあまりなく佐賀に残ることにしました。県内の建設会社に就職し土木工事の現場監督として4年間働き、短い間でしたが良き先輩にも恵まれとてもいい経験をしました。その後水道企業団に採用され、φ13ミリの給水管からφ1,200ミリの送水管の設計、施

工管理、維持管理まで行いました。浄水場では水づくりに携わり取りあえず一人前の水道屋にはなれた気がしています。

最後に 10 回卒までの卒業生は、節目の 60 歳定年を迎えられたと思いますが、体に気を付けて第 2 の人生を謳歌してください。バリバリの現役の皆様にはおかれましては、ますますのご活躍をお祈りいたします。

土木工学科設立 50 周年に寄せて(本学との関わり)

日本国土開発株式会社 栖原秀郎(昭和 51 年卒業 昭和 53 年修了)

土木工学科設立 50 周年、おめでとうございます。

現在、私は昭和 53 年修士課程修了後日本国土開発入社以来、43 年目を迎えております。

思い起こせば、今回で寄稿文等の投稿は 4 回目となります。1 回目は、土木工学科 20 周年記念誌に、2 回目は、三回生卒業 30 周年記念事業報告として楠志会会報 2006 に投稿しています。3 回目は、2013 年に低平地研究会に論文を投稿しています。また、1998 年と 2006 年に就職を控えた在校生に対する土木技術者としての体験講演会、2014 年の楠志会 40 周年記念事業においては、佐賀大学との関わりも含め経験した土木技術、環境技術についての実績報告と研究成果を講演させていただきました。こうしてみますと、土木工学科設立より各節目の年への投稿および講演の機会をいただき、感謝の念に堪えません。

最近では、2018 月で終了しましたが日本国土開発勤務の傍ら、佐賀大学低平地沿岸研究センター客員教授および特命教授として 6 年間、荒木先生、三島先生の研究室で、佐賀大学、原社長の日本建設技術およびわが社との共同開発の機能性吸着材（リン、砒素等重金属吸着材）についての研究開発を行う傍ら建設業実務についての講義を行いました。5 件の特許取得ができました。わが社はもちろんですが佐賀大学にも貢献することができたと考えています。

また、これら寄稿文、講演会原稿を読み返してみると、ここ 20 年の私は、「環境技術による社会貢献」というテーマで仕事をやってきましたが、「ある程度社会貢献できたかな」と感じるところです。

ここでは、これら寄稿文や講演会で話した内容の中から、私の土木技術者として転機となったこと、「環境技術による社会貢献」ができた代表例を中心に紹介します。

私の環境技術との関わりは、1992 年の旧建設省発注の共同溝工事の現場所長の時から始まりました。ここでは、当時珍しかった建設汚泥のリサイクルを行い、埋戻し材として再利用し中部建設局長賞およびリサイクル推進協議会会長賞受賞しました。

この時期、日本国土開発名古屋支店に名古屋勤務していましたが、支店長の命令に近い形で岐阜大学社会人ドクターコースに入学し(させられ)、3 年後の学位取得まで 3 現場の現場所長を務めつつ研究開発に励むことができたのは、大変幸運であったと思います。

また、この間の現場勤務の中で、特に 1993 年の名古屋港海浜整備工事においては、人工海浜を作るに当り海洋汚濁防止を最重点において施工しました。その結果、2002 年にここでのウミガメの産卵が確認され、名古屋港水族館長(ウミガメの世界的権威)の監修のもと人工ふ化後放流しました。このような湾の奥での産卵は、世界的にも珍しいと話題となりました。余談ですが、11 年後の 2013 年には 5km 先の海岸で産卵が確認されており、ここで生まれたウミガメかもしれません。

また、この間の博士課程の研究内容は、わが社の環境に配慮した無発破低振動工法(KNBB

工法)の設計法に関する研究等クラックの研究で、幸運にも学位を取得することができました。博士課程修了後は名古屋支店で品質および環境システムの構築にあたりました。1996年にISO9001、1998年にISO14001認証取得をそれぞれ中部地区のゼネコンの中でスーパーゼネコンを含め最初にしかもコンサルタントの手を借りずに独自取得ができました。

このころ、私は、ISO認証取得業務の傍ら、当社の本社各支店を通じて横断的な組織である環境エンジニアリングチームに所属し、不適格廃棄物処分場の適正化提案や当社開発の焼却炉のダイオキシン除去装置の技術営業を行い、自治体への導入に成功しました。

ここまでは、結構順調に事が運んでいたのですが、世の中は、調子のいいことばかりではありません。ISO14001認証取得直後の1998年12月日本国土開発は、事実上の倒産である会社更生法申請しました。呆然としている中で、この倒産から2日後に送られてきた荒牧先生の手紙にどれだけ励まされたかわかりません。その励ましのことば(抜粋)を紹介します。

「殿軍(しんがり)とは、敗北して退却する軍隊の最後に残って味方の逃げるのを助ける部隊をいう言葉です。そして、殿軍を指揮する隊長は、冷静でかつ熱い人間ないと勤まりません。その地の先輩木下藤吉郎は、浅井・朝倉連合軍を背に退却する時、後世に残るような指揮をして信長の、そして部下の信頼を得たそうです。卑屈になどならずに大声をだしながら退却していく若い秀吉とその部下たちに、貴方と貴方の仲間たちの姿がだぶります。

貴方のことだから、最高の危機管理をしてのけるだろうと確信しています。そして、半年後か1年後か、その仕事が終わったら貴方自身のことを落ち着いて考えるときがくるでしょう。その時は私にも声をかけて下さい。勿論、退却線の最中でも構わないのですよ。・・・・・・・・・・

もしかしたら、あなた方の高い思想と技術力が、生き残るためのビックチャンスかもしれません。肩の力を抜いて一度深呼吸をしてチャレンジしてみてください。貴方と貴方の仲間達に佐賀の地よりエールを送り続けています。」

この荒牧先生のこの言葉に励まされるとともに、今からは、自分に対しては、好きな仕事だけをしよう。迷惑をかけた社会に対しては、当社の環境技術で社会貢献しようと思い決めました。これにより、吹っ切れた気持ちで出直す決心がつけました。

私が出直しの第一歩として最初に手掛けたのは、このころわが社の機電グループが開発した「破碎と混合が同時にできるツイスター工法」にかけてみようと考えました。会社更生期間中の2000年～2002年にかけて、多数のツイスターの公開実験を実施しました。当時の建設省、運輸省、愛知県、名古屋市やコンサル等にも積極的に紹介しました。当時地盤工学会の会長も務められていた名古屋大学浅岡教授と知り合ったのもこの時でした。先生はツイスターを絶賛し、外部に積極的に紹介していただきました。

この工法は、円筒形の鉄の筒の中で、チェーンが高速回転しているだけのシンプルな構造にもかかわらず大量施工ができ、しかも改良の難しい粘性土の改良も容易にできる特徴を持っていました。

しかしただ単に土を処理するだけでは単価は低く、これでは商売になりません。こう考え

た私は、2002 年「第 2 東名高速道路大和田坑口盛土 50,000m³」の工事に営業をかけ、公開実験によりツイスター工法能力混合性能の良さばかりでなく、締固め試験結果で他工法を圧倒し当工法の採用を勝ち取りました。

次に、量を稼ぐことと併せて、もっと付加価値（単価）を上げようじゃないかと考えました。まずは、廃棄物への適用として、2003 年には「長湫南部土地区画整理事業造成工事 10,000m³」において廃棄物処理されていた亜炭を発生土と破碎攪拌混合することにより埋戻し土として、2004 年には「2005 年日本国際博覧会藤岡インター駐車場整備工事 37,000m³」において、窯業副産物微粒珪砂きらと現地の豆砂利を同様な方法で処理し、路床材としての有効利用での工事受注に成功しました。これで単価が 1.5 倍～2 倍になり、事業とする見通しが立ちました。

もっと単価の高い業務に適用できるのではないかと探していたところ、名古屋大学の浅岡先生が「ツイスターは粘土を砂に変える機械。空気を介して通常まざらない水と油が混ざるようなものだ」と仰っていたことを思い出しました。

空気と一緒に混ぜると土壌の揮発性有機化合物を飛ばせるんじゃないかと発想した私は、濃度が薄ければ、ツイスターを通すだけで、見事に汚染物質である揮発性有機化合物（以下「VOC」とする）を除去することに成功しました。また、濃度が濃い場合は、生石灰を混合することにより発熱による気化した VOC を活性炭吸着させる方法で除去することに成功しました。国交省発注の「長野土壤汚染措置工事 255m³」は、VOC 除去工法の先駆けの実績となりました。その後、「愛知県 H 市某所汚染土壤浄化工事 10,000m³」「大阪府 S 市工場跡地土壤・地下水汚染浄化工事 30,000m³」と大型案件を受注し、当時、日本最大の 100 万 m³ の不法投棄として有名な岩手・青森県境産廃浄化工事等の受注へとつながっていききました。引き続き、震災復興工事や、羽田空港 D 滑走路工事、東京外環道路工事に何十台ものツイスターが投入され、これをきっかけにして、ツイスター工法は、土壌の必要強度を得るばかりでなく、VOC 除去や不溶化等の土壤汚染にも非常に有効な工法として世間に認知されたことを実感しました。現在、トータルの施工量は、600 万 m³ を超えわが社の看板工法となりました。

20 年前から 10 年間は営業はほぼ私だけで行っていた時代がうそのようです。

この次に私が注目したのは、わが社と早稲田大学で共同開発した陰イオン吸着材でした。ここでは、粘土鉱物であるハイドロタルサイトを人工的に吸着能力が格段にアップした機能性吸着材であるナノサイズのハイドロタルサイトの合成に成功していました。

このころ、なんの会だったかは記憶が定かではありませんが、3 回生の集まりで同級生の荒木先生が、原社長の日本建設技術と共同でハイドロタルサイトとゼオライトを使ったリンの回収を研究していることを知りました。

ここで、とんとん拍子にわが社の機能性吸着材を使ってみてもらえることになりました。従来品のハイドロタルサイトよりもリンの吸着能力が優れていることが確認されたため、佐賀大学荒木・三島研究室、原社長の日本建設技術および当社日本国土開発の 3 社での共同

研究が始まりました。同時に、私も客員教授としてこのプロジェクトに参加することになりました。成果としては前にも述べましたが 3 社の共同特許を含め 5 件の特許を取得することができました。

現在、私は、工場跡地の環境修復工事に携わっていますが、この機能性吸着材を土壤汚染拡散防止や水質浄化に使って工事を行っています。この中で、「環境技術による環境貢献」ということに対しては、まずは挑戦してみることをモットーに失敗してもやり続ける強い信念をもってやってきました。土壌浄化を含む環境関連工事においては、今までに経験していないことも多く 5 回に 1 回くらいは失敗し、叱られることもあるのですが、その時こそが正念場ととらえ、上司に「5 回の内 4 回は、社会貢献ができていて、しかも儲かっており失敗を引いてもトータルでも儲かっています。それでもやめますか。」と聞き直ります。

こうして大概の場合やれということになるので、その時初めて気持ちをこめて謝ります。こうして継続的に環境関連工事を受注することができるようになるとともに、客先にも感謝され、しかも地球環境にも貢献できたと自負するところです。私は、当社で 60 才直前に定年が 65 才になり、また、65 才直前に定年が 70 才になりました。この分では、今年で 69 才になりますが、また定年が 75 才になるのではないかと期待を持っています。会社からもういらないと言われるまで突っ走るつもりです。

巻末にここで述べたエピソードについての写真を添付します。

最後に、今後の佐賀大学および土木工学科を継承する学科の繁栄を祈念しまして筆をおくこととします。

今回、投稿の機会をいただき、あらためて心から感謝申し上げます。



2002 年

ふ化したウミガメ

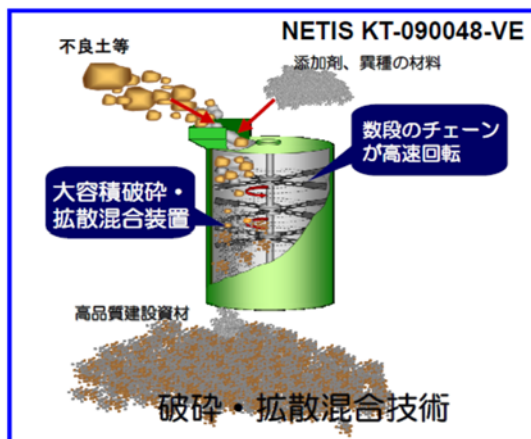


ウミガメの足跡



2002 年～

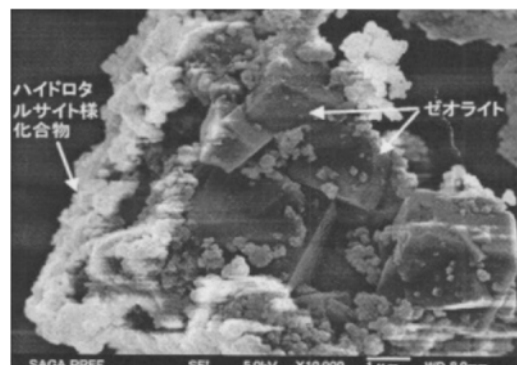
ツイスター工法の施工原理と
粒状石灰の混合状況(粘性土)



2013 年

佐賀大学・日本建設技術・日本国土開発
で共同開発されたハイブリッド吸着材

顕微鏡写真



土木工学科 50 周年寄せて タイトル「二兎を逃がしていけない時がある」

所属 (株)精工コンサルタント

氏名 南里 勝

修了 昭和 57 年 3 月 大学院修士課程

○学生時期

・私が佐賀大学に入学したのは、昭和 50 年 4 月である。その当時の学科は、土木工学科の名称であった。私は、大学 4 年及び大学院で 3 年間、鬼塚研究室に席を置いた。研究テーマは佐賀県特有の軟弱地盤ではなく、佐賀県北部山地に分布するマサ土の力学的特性を研究した。今、思うとこの時に有明粘土等の軟弱土を研究していれば、その後の現場や研究（社会人入学）に大いに参考になったのではないと思われる。

○県庁在職時のこと

・昭和 57 年 3 月に大学院（修士課程）を卒業した後、佐賀県庁に入庁した。

・佐賀県庁には約 35 年在職し、この間に様々な業務を経験した。県庁土木職の仕事は、様々なセクションがある。道路河川の他に、都市計画やダム、港湾等があり、県庁の土木行政は幅が広い。

・昭和から平成へ時代の変化とともに、行政マンとしての思考方法と対応は変化せざるを得なかった。その時々において県民からの要望依頼が変化し、その対処が追いつかない状況もあった。このように、社会の変化に対して、業務遂行の判断力や説明力を身に着ける必要を感じた。

・こうした中で、30 歳後半に県庁マンとしての「枠」を飛び出す時機が来た。当時の佐賀大学には、大学院博士後期課程が設立されており、多くの社会人が入学（入院）していることを知った。私は、当時、県庁土木部の技術総括的なセクションに在籍していた。県の現地機関から、有明海沿岸における水分を多く含む建設発生土の処理方法を相談されていた。そこで、この軟弱な建設発生土の処理技術を探求するため、県庁在職のまま大学院博士後期課程に入り、県庁マンと研究生活の二束のわらじに突入した。余談であるが、大学入学した昭和 50 年当時の国立大学の入学金学費は、私立大学に比べて非常に安かった。しかしながら、20 年後の博士後期課程の入学金学費はとて高くなっており、妻の了解を得るのに一苦労した。

・社会人として午後 5 時 15 分まで県庁で仕事をして、その後大学に行って鬼塚先生や研究室の 4 年生と実験をやり、また論文作成とその指導を行った。よく大学食堂で晩御飯を食べたこと、毎週土曜日は大学に通ったことを覚えている。

・この時期に神戸淡路大震災が発生した。阪神高速道路の橋脚や桁が倒壊している状況をみて驚愕した。地震国日本の建設技術はレベルが高いと思っていたが、自然の巨大なエネルギーに対して技術の脆弱性を知らされた。

・社会人研究生活を 3 年で終わらせることにしていたが、結局、4 年を費やした。研究の成果は、軟弱な建設発生土の処理を大きく進展させることになった。前述したように、学生時

期に軟弱地盤の基礎を知っていれば、この時期に多く苦勞することはなかったのではないかと思った。県庁マンと社会人研究者の二束のわらじを終えたあと、発注者としても技術者としても多くの課題に直面した。

- ・県庁在職の終わりごろに、本格的な軟弱地盤の業務に関わることができた。佐賀県が実施している有明海沿岸道路整備である。この事業において、地盤工学的な課題が多く、理論と現場挙動等を踏まえて軟弱地盤対策を進めてきた。地盤工学は他に比べて、まだ未解明な部分が多い。とくに、軟弱地盤には想定外のことが隠され、事前にリスクが表に現れることは稀である。様々なリスクの一部でも事前に確認できれば、より効果的な対策を実施できたことを反省した。

- ・以上のように県庁在職の最後で、軟弱地盤に関わることができた。有明海沿岸の軟弱地盤への取組みについては、地域の技術者が各々の分野で知見や経験、そして技術論を持っている。しかし、各分野の技術者が共同で議論する、情報共有する機会が少なく感じた。そこで、発注者と設計者、さらに施工者が抱えている課題、苦勞話を、三者が情報共有する必要があると考え、県庁在職の最後に関係者を集めて討論会を実施した。

○現在、思うこと

- ・県庁退職後は、佐賀県内の建設コンサルタントに就職し、建設工事関連業務を受注する立場になった。まだ、佐賀県内の技術者は、経験したことがない新たなことに対して、躊躇し足踏みしている感がある。よくいわれる佐賀県人に多い「優柔不断」は、この世界にもあると思われる。

- ・今後の公共事業の推移がどうなるのか。喫緊の課題である社会インフラの維持管理や想定外の災害への対処にどう挑むか。これからは、建設技術者として建設分野の枠を超えたジャンプが求められると思う。

- ・協見をせず一兎を追うことも必要である。しかし、年齢を重ねても、二兎を逃がしてはいけない時機が、また、いつか来ることを期待したい。

タイトル：「佐賀大学土木工学科の思い出」

所属機関名：（一財）佐賀県環境科学検査協会

氏 名：松尾保成

卒業・修了年度：昭和 59 年 3 月卒業、昭和 61 年 3 月修士修了、平成 15 年 9 月博士修了

1980 年の入学当時から 2021 年 3 月の現在まで佐賀大学に係わってきたことを振り返ります。

土木工学科に入学を決めたのは、高校 3 年生の時に長崎自動車道が建設されていた橋梁を見て「土木って凄い！」と思ったことが、入学のきっかけとなりました。入学して直ぐにオリエンテーションがあり、土木工学科の玄関前で、全員で画用紙サイズに書かれた名前札を持って、集合写真を撮ったことを思い出します。また、強烈な印象は、教養部の大講義室の前で歓迎コンパあり、今では考えられませんがヘルメットを盃に日本酒を呑み干したことです。今思えば、野蛮な行為だったのですが、古き良き時代だったと思います。

1 年の教養課程で、勉強していたにもかかわらず、心理学と日本国憲法を「不可」を頂いたときは残念でした。2 年生の時に再履修して「良」を貰った時は嬉しかったのを覚えています。3 年生の時には、夏休みの企業研修で井前先生から紹介されて旧建設省土木研究所（筑波）の下水研究室で 40 日間の研修を受けました。神田川の河川調査や下水処理場の調査を行いました。これを期に 4 年生の研究室を衛生研（井前研究室）に希望し、私が衛生工学・環境工学に関する研究業務に携わるきっかけとなりました。さらに、修士課程に進学してからは、井前先生、古賀先生、荒木先生の体制でご指導いただきました。4 年生の時から引き継いだ「下水処理のオキシデーションディッチ法」の研究です。当時は、ミニプラントとはいえ、大規模の実験装置は、他の大学には無かったと聞いています。当時は実験器具も少なく、使ったガラス器具を直ぐに洗い、使い回す状態でした。研究費も少なかったのですが、時間はたっぷりありました。そのため、実験装置、測定器具は、学内のゴミ捨て場から拾い集めた部品をもとに全て手作りでした。データをとるにしても、どうやったら良いデータが取れるか、創意工夫することを学びました。

卒業後、佐賀市内の建設会社技術研究所に勤務し、水環境分野の開発業務を行ってきました。当初は小規模廃水処理システムの開発、ゴルフ場開発における環境影響評価、水産加工場廃水処理施設、し尿処理の計画・設計、ため池の水質改善など環境面の技術開発を行ってきました。平成 9 年から、「貝殻を再利用した水域直接浄化システムの技術開発」を佐賀大学との共同研究として 4 年間取り組みました。その後、自己研鑽として共同研究で取り組んできたテーマを体系的に取りまとめる意味で、社会人ドクターコースに入学しました。共同研究から約 7 年間の長期にわたる研究開発でした。同時期に平成 13 年からの 5 年間は、佐賀大学を中心とした産官学のプロジェクトである「有明海における底質改善と底棲生物回復のための技術開発」の共同研究を行ってきました。その間、培ってきた研究開発業務を活かして建設コンサルタント会社に転職いたしました。如何に廃ガラスを

再利用するかがテーマです。ここでは廃ガラスを再生した水質浄化システムの研究開発と、その実用化としてダム流入河川の浄化施設の計画・設計を行いました。また、文部科学省からの研究として10機関のプロジェクト研究「有明海生物生息環境の俯瞰的再生と実証試験」に参画しました。平成13年からの有明海の研究は、9年間におよぶ長い共同研究となりました。

現在は、建設環境コンサルタントの業務拡充と技術者育成の為に、県内の環境分析機関に在席しています。ここでは、長年に渡って蓄積されたデータを可視化して、課題を抽出し解決する業務を行っています。これらの業務の中で、佐賀市上下水道局と佐賀大学との産学官連携で、「下水処理施設の季節別運転管理によるノリ養殖海域への効果」の4年間の共同研究を行ってきました。

今までの業務の中で、課題解決のために佐賀大学と色んな共同研究を長年行って来てきましたが、良い技術開発が出来たと思っています。佐賀大学は地域に貢献される大学と思っています。

最後に、佐賀大学土木工学科設立50周年、万歳！



下水処理実験プラントにて（4年生の時）佐賀大にて



貝殻を再利用した浄化実験プラント（平成11年6月）佐賀大にて



有明海底質改善のフィールド実験（平成 14 年 3 月）鹿島市飯田海岸

入学から39年を経て

株式会社五省コンサルタント（福岡市）中川 雅登（ナカガワ マサト）

「卒業」1987（S62.3）

昨年からは福岡市で港湾・漁港・海岸といった海を専門領域とした建設コンサルタントである株式会社五省コンサルタントの社長をしています。

社長になり、わが社の将来を担う若手技術社員を新規採用すべく、佐賀大をはじめ九州・山口の国立大工学部の学生向けに Web でのオンライン会社説明会、オンラインセミナーで話をする機会は最近増えましたが、ネット越しに大学生に説明する脳裏に約40年近く前の佐賀大のある本庄周辺のことを思い浮かべています。

浪人生活を脱出し、入学したのは昭和57年春でした。親が転勤族で各地を転々とし、高校は福岡市で過ごした私でしたが、佐賀市は大学受験するまで訪れることすらありませんでした。

1982年が従来の土木工学科に加え、建設工学科が新設された年です。土木・建設工学科合わせて80人が同級生となり一緒に学びました。

1、2年生の頃、住んだのは現在佐賀女子高があり、当時は佐賀球場であったあたり。

閉口したのが、佐賀市内は当時、住宅や個人の飲食店のトイレがほとんど汲み取りであったこと（佐賀市の下水道共用開始からまだ4年後で整備率は5%もなかったと記憶）や、大学周辺のあちこちにクリークがあり夏場は蚊の大群の襲撃を受けたことです。

福岡市ではどこにでもあったコンビニが入学当初の佐賀市内は、数店舗セブンイレブンがあるだけで本庄町界限には全くコンビニがなく、教養部前の野中商店がコンビニの替わりでした。本庄キャンパスから佐賀駅へ行くバスは、1時間に1～2本で車内はガラガラでのんびりしたもの。当時福岡市は地下鉄開業直前で、ラッシュ時は数分おきに来るバスがぎゅうぎゅうでバス停で満員通過！乗れないということもしょっちゅうでしたのでなんという違い、いやはや、とんでもない田舎に来てしまったなと思ったものでした。

1年生夏休みにバイトをしてすぐに原付を手に入れました。これで界限を通学、遊び、バイトと快適に移動していました。

土木工学科棟のすぐ南側の通称南部バイパス、この道の南側は、建ったばかりの大学の楠葉寮やホンダのバイクショップがあるだけであとは果てしなくずっと田んぼが広がっていました。

とんでもない田舎やなと思いながらスタートした学生生活でしたが、そのうち学科内や学内のあちこちに友達や知り合いができ、長期のバイト先も確保しと、そのうち長期の休みも帰省せず佐賀でほとんどを過ごすようになりました。

土木工学科棟の目の前のバイクショップを拠点に、大型や中型2輪に乗り、ツーリングをしている同級生たちもいました。触発されて中型2輪の免許までは取得しましたが、維持費が高いバイクのためにバイトするのも嫌で結局持たずじまい。

そのうち土木学科のメンバー5～6 人ほどと夕方から雀荘でしょっちゅう朝まで麻雀をする日常に。

飯も大学生協か教養部の前に学生向けの安い定食屋が多くそこかすませていました。教養部東側は現在2車線の広い通りですが、当時は狭い1車線道路で、佐大生御用達の焼鳥屋がずらりと並んでおり、よく足を運んでいました。世の中的には、チューハイがちょうどブームになった時でした。

とにかく、大学も住まいもバイト先もみな近く、コンパクトの環境で楽しく充実した日々を過ごしました。

専門では長時間の実験があり、交代で夜も大学へ計測に行ったり、いろんなレポートを仕上げるのに、みんなでよく集まったり、前期の試験は当時夏休み明けの9月中旬にあるので、夏休み後半はみんな佐賀に帰ってきて試験対策の勉強をしたり課題をしたりと、懐かしく思い出します。

当時、学生の下宿にはほとんどクーラーは備わっていませんでしたが、9月に入ると佐賀でも夜は気温が22、3度になり、試験対策で夜遅くまで勉強していると窓を閉めないと寒く感じる日もありました。10月でもクーラーが必要な日がある今はやはり温暖化が如実に進んでいます。

就職は港湾や空港の整備を担当する運輸省第四港湾建設局に入省し初任地は山口県。佐賀同様、比較的小さな町で過ごしましたが、3年目に本省転勤となり東京へ異動。横浜市の寮から霞が関へ通うが朝はつり革さえ握れない猛烈なラッシュの電車。帰りは、週の半分以上は終電に間に合わず、タクシーで横浜まで帰るか、週のうち1～2日は役所にそのまま泊まるハードな毎日が4年間続きました。

ちょうど、コンサルに就職した同級生を中心に何人か当時東京周辺に集まっていたのでたまに新宿などに集まって九州訛りで話せることが楽しみでした。

また、平成18年から2年間は関西国際空港(株)へ出向し、大阪で勤務しましたが、この時も佐大土木の在籍の同級生たちとたまに難波で会うのが第二滑走路の供用に向けて整備事業が最盛期の忙しい日々の中で安らぎでした。

平成13年に運輸省と建設省は合併し、国土交通省となり、九地建に進んだ同級生、後輩、先輩とも同じ佐賀大卒ということで九州地方整備局技術職員の佐賀大同窓会を一緒にしていました。九州地整の土木系職員は、大卒で一番多いのは卒業生そのものが多い福岡大、その次が、熊本大と佐賀大が並んでいます。

(佐賀大は、理工学部に加え、農業土木学科卒業生もいる)

17回の転勤、13回の引越を数え、九州で20数年、関東や関西で12年過ごした国土交通省を早期退職し、今は福岡市内で働いています。あまり勉強もせず(?)佐賀で一緒に過ごした同級生たちも、市役所の部長、コンサルの役員や創業者社長、ゼネコンの執行役員、高校校長、県庁の課長などで活躍中です。

理工学部他学科の知人には、我が国有数の電気メーカーや造船会社に就職したものの、そ

の後の日本経済の国際競争力の低下や構造転換により醜いリストラにあい今は全く違うことをして生きていくなど苦労している人もいます。

それに比べ、我々は、(経営難で会社を変えた人はいますが)、ほとんどが今も国土基盤づくり、インフラ整備の場でそれぞれ活躍の場を得ています。使命感を持って仕事ができる幸せ、この道に進んでよかった！

そしてもうしばらくは、社会の第一線で頑張っていこうと思います。

○写真1

82Tの土木工学科メンバー、1983年頃、コンクリート実験室の前にて



○写真2

30数年後、仙台からS君が福岡に来た時に集まった土木の面々



大学での勉強と出会いの大切さ

第一復建株式会社 森山秀馬 卒業・修了年度：昭和 63 年度(平成元年 3 月卒業)

土木工学科設立 50 周年、誠におめでとうございます。私は、旧：建設工学科 4 期生、土木工学科で言えば 16 期生です。平成元年度(1989 年)に就職した社会人であり経歴 31 年になります。新卒で就職した建設コンサルタント、第一復建株式会社で元気に勤務しています。今は取締役という重責を担わせていただいております、大変忙しいですが充実した日々を過ごしています。私は 4 年で卒業はしましたが、大学での成績はぎりぎりセーフだったと記憶しています。就職して間もない頃は、技術的な知識のほとんどは会社に入ってから学んだかのように思っていたのですが、今思えば、大学で先生方から教わった基礎があったからこそ、技術の上達があったのだと実感しています。最近でこそ、若手技術者に直接指導する機会は随分減ってきましたが、教えること、伝えることの難しさを身をもって思い知り、先生方が私達学生にどうやって土木工学を理解してもらおうかと日々ご苦労されたんだろうと容易に想像できます。生涯勉強は必要ですが、勉強に専念できる時間がたくさんあった学生時代、もっと真剣に勉強していたなら、更に高いレベルで仕事できただろうと本当にもったいないことをしたなあと思うばかりです。熱心にご指導くださった先生方に改めて、感謝を申し上げたいと思います。

勉強と並んで人生で重要なことは、やはり、人との出会いだと思います。私の場合、職業の分野が大学での専攻分野と同じだったので、なおさらであるかもしれません。在学中で言えば、卒業研究でお世話になった三浦哲彦先生、坂井晃先生を始め、同じ研究室の 4 年生・大学院生、授業で講義をしていただいた先生方、具体的には、構造力学は、後藤茂男先生、荒牧軍事先生、井嶋克志先生、交通計画は、高田弘先生、コンクリート工学は、石川達夫先生、石橋孝治先生、水理学・水文学は、渡辺訓甫先生、岸川信義先生、衛生工学は井前勝人先生、古賀憲一先生、荒木宏之先生、土質力学、地盤工学は岩尾雄四郎先生、鬼塚克志先生、そして、同じ学科の同級生、これだけでもたくさんの方と出会うことができました。卒業後は、土木工学科の先輩に声をかけてもらい、同窓会に参加させていただいたことで、さらに出会いが増えました。現在では、出会った方々と業務で関わったり、相談や情報を交換させていただいており、大切な方々となっています。

在学中の学生の皆さんに言いたいのは、大学での勉強と出会いを大切にしてくださいということです。大学で教わったことは本当に役に立ちます。私のように後悔しないようにしっかり先生方の講義を聴いて、社会にデビューし、佐賀大学の卒業生として活躍されることを期待しています。また、勉強を教わった先生方や同級生、先輩方との出会いも今後の人生においてきっと役に立つと思います。土木工学科は名称が変わり、内容も都市基盤工学コースに加え、建築環境デザインコースと領域を広げているようで、今後も社会のニーズに合わせた進化、展開を期待しています。大学で学んだことを活かし、出会った人たち、先輩方とともに社会に貢献していきましょう。

私が大学4年生の時に所属した通称「衛生研」は、第2生協前、当時たぶん建設棟とか呼ばれていた建物の4階にあった。土木系には珍しく薬品も扱う研究室で、パソコンを使った水質解析などの他にも、白衣を着て水質検査の実験をするような研究室だった。

教授をはじめとする先生達が3人、院生が5人、学部生10人の大所帯だった衛生研は建設棟の4階をほぼ使用しており、学生の居室や先生達の部屋が並ぶ廊下の一番奥には実験室があった。

実験室の片隅には、白衣を洗うための洗濯機が置かれていたが、それは古く、ちょくちょく様子を見ていないと洗濯槽から水があふれてしまうという、ちょっと面倒くさい代物で、これはそんな洗濯機にまつわる思い出話である。

ある夜のこと。実験室の片隅の洗濯機から水があふれ出した。

サークルで毎日のようにサッカーにいそしんでいた同じ研究室のO君は、練習後のジャージやユニフォームを洗うのに研究室の洗濯機を愛用し、その日も洗濯をしていた。彼曰く「ちょっと目を離した」隙の出来事だった。

研究室には院生をはじめ、何人かの学生がまだ残っていた。彼らがO君からの緊急事態の報を受け、実験室に駆け付けた時には、既に洗濯機からの水は実験室を越え、廊下にまで達する程になっていた。

「こ、これは・・・」と大惨事を目の当たりにした学生達は事態を收拾するため素早く行動を起こした。モップで水を吸い取る、はずだったのが、何故か一人はビデオを構え、一人は手にしたモップをマイク代わりにその場でリポートを始めてしまった。「今、大洪水の現場に来ています！」――

すっかり盛り上がった学生達は、大事件の詳細を伝えるべく4年生部屋に即席のスタジオもしつらえた。黒板には当時の某ニュース番組を真似て福岡タワーとももち浜っぼい絵がチョークで描かれていた。

廊下からのリポートに負けず劣らずスタジオ(4年生部屋)でも院生達が緊張感あふれるキャスターとコメンテーター役を熱演し、他にも小ネタを収録して「大洪水‘93」とタイトルシールの貼られたビデオは完成した。もちろん先生からは怒られ(呆れられ)たが、それは既に家に帰っていて現場に居合わせなかった私を含め、研究室の他のメンバーが後から観ても大爆笑する程よくできていた。

そう、私はその場にいなかったのに(不確かな部分は多々あるにしろ)こんな風にかけるくらい、今でも私達の間でこの話は「鉄板ネタ」なのだ。ちなみに研究室に残されたビデオは、その後も何年かは後輩達を楽しませてくれたらしい。

後日談がある。

院生として研究室に残った〇君は、その後も同じことをやらかした。

結果、実験室の真下に部屋がある3階の教授から「何故か雨漏りがする」と苦情が入り、うちの先生が平謝りするという不名誉な事態に発展し、実験室の片隅には、先生のポケットマネーで買ってもらった新しい洗濯機が置かれることになった。

今では学部の中でも相当古い建物になってしまった理工学部4号館が、たぶん建設棟とか呼ばれていて、まだ壁の白さを誇っていた頃の話である。

佐賀に来てから 30 年・・・

平成 7 年土木工学科卒業 根上武仁

今から 30 年前の春、私は佐賀大学の正門をくぐった。1991 年のことである。当時は、「猫の目入試改革」なる時代で、A 日程、B 日程、C 日程、前期日程、後期日程、2 次募集などがあった。今は大学入学共通テストとなったが、共通一次試験から大学入試センター試験に名称が変わったのもこの頃で、浪人した私は共通一次試験も大学入試センター試験も受験した。ちょうど湾岸戦争があっていて、連日テレビではミサイル攻撃や爆撃の様子が報道されていた。その年の 6 月には、雲仙普賢岳の火砕流で大きな被害があり、NHK の深夜放送は、雲仙普賢岳の火砕流に関する内容だった。7 月には梅雨の大雨で、大学の正門付近が膝ぐらいまで冠水した。まさか講義はないよね・・・などと友人と話していると、自然休講になる 5 分前に先生が来られて、講義が始まった。今は道路も拡幅されて正門前は綺麗になり、よほどの雨が降っても冠水はしないが、当時は結構冠水していたように思う。9 月にやってきた台風 17 号のおかげで、当時住んでいたパートは 3 日ほど停電したし、その日の朝外に出たときは、昼半分ほどの看板が 4,5m 先をゴロゴロと転がっていったのを覚えている。91 年当時は 1 コマ 100 分で、土曜日も講義があった。教養部での留年はシャレにならなかったのので、必修科目の語学と数学、物理は頑張ったのを覚えている。物理は結局単位をとれず、2 年生に積み残してしまったが・・・ 測量器具を使った実習は、誰彼と話をする良いきっかけだったと思う。

それでもなんとか留年せずに 2 年生になり、この年の夏に自動車の免許を取った。また、学生生活に慣れてきたのもあり、この頃から家庭教師のアルバイトを始めた。92 年は、土曜日の講義がなくなり、90 分授業になったように思う。教養留年は免れて、学部移行なる状態になった。受験時は「土木工学科」を受験し、土木工学科に合格するのだが、最初は教養に配属されていて所定の単位を取得すると学部に移行し、土木工学科の講義を受けるシステムだったように思う。振り返ると、教養留年があるおかげであまり中だるみせずに済んだのかもしれない。1 年目に比べると、慣れみたいなものもあったのか、印象に残る出来事はあまりないように思う。

3 年生は、慌ただしく過ぎたように思う。上半期は週に 3 回の実験があったので、レポート書きに追われていた。この年の 5 月の連休中に母方の祖母が亡くなった。身近な人間の死に初めて触れたのだが、ずいぶん悲しかった。久しぶりに顔を合わせる親戚から、鹿児島に戻って来ないかと誘われた。当時、指宿市の池田湖で「イッシー」なる未確認生物の目撃情報があり、親戚の伯父が「イッシー対策本部長」だった。子の伯父から熱心に誘われた。指宿市の人口も減りつつあり、市役所職員としては、少しでも人口が・・・との思いもあったようだ。夏休みは、土質試験のコンサルタントでアルバイトをした。この時にお世話になった会社の社長（今は会長）にはかわいがっていただき、現在も時折ご挨拶させていただいている。下半期は設計演習で苦労した。コンクリートの設計製図では、とにかく図面を書くのが大変だった。構造力学や土質力学、水理学など、落としてはいけない「3 力学」やコン

クリート工学も落としていたので、再試験も受けまくった。当時は、いろいろな先生方から再試験のチャンスをいただけた。これは本当にありがたかったと今でも思う。

4年生になって、鬼塚研究室に配属された。当時は4年生だけで研究室メンバーが8人いて、にぎやかだった。4年生になった当初は、漠然と公務員になろうと思っていた。しかし、研究室でM2の大学院生と留学生との出会いがあり、結局今に至っている。二人からは、「大学院っていいよ」とお話があった。浪人した上に大学院まで・・・とは思ったが、両親に相談すると、好きにしていっていいと言ってもらえた。ちなみに、8名中私も含めて5名が修士課程に進学した。年が明けて1月17日に、阪神淡路段震災が起こった。当日は、研究室で数名が徹夜しながら卒論を書いていた。地震直後に、みんな軽い眩暈になったことを覚えている。誰かが、「疲れたせいか眩暈がする」と言ったのに対して、全員が自分も眩暈が・・・となり、変だねなどと言いながら作業を続けた。まさか佐賀で地震が起こるなんて思ってもいなかった。当日の昼頃に、誰かがテレビをつけて、やっと震災のニュースを知ることになった。その時、佐賀は震度2程度で揺れている。1週間ほど後に、関西出身の友人と一緒に、車でフェリーを利用し、大阪から神戸入りしたが、実際の震災の現場はひどいものだった。この後から活断層とか直下型といったキーワードが使われるようになったように思う。

佐賀にやってきて約30年、土木工学科を卒業して26年経った。振り返るとあつと言う間だった。土木工学科と建設工学科が統合されて都市工学科となり、都市工学科は都市基盤工学コースと建築環境デザインコースになった。それぞれの建物（理工学部3号館と4号館）もリフォームされ綺麗になった。次の10年後、20年後は組織はどうなっているのか、自分はどうなっているのか、ちょっと楽しみである。

設立 50 周年を迎えて

西尾 順

佐賀東部水道企業団

平成 9 年度卒業

設立 50 周年を迎えたことを心から嬉しく思います。非常に感慨深い気持ちです。

目の前のことに精一杯で、これまでのことを振り返る余裕もなく過ごしてきましたが、この機会に在学中のことが懐かしく思い出されます。

卒業後 20 年以上も前の事で記憶はかなり霞んではいますが、立派な技術者になることを夢見ていました。大学生活や卒業後に期待もありましたが、当時はバブル後で景気がいいとは言えず、かなり不安があったことを覚えています。大学へ進学したものの、自分が進むべき道が見えてこない時期もありました。お恥ずかしい話ですが言い訳ばかりで、努力もせずフラフラ過ごしていた時期もあったと思います。

そんな中、学士 2 年生の時に阪神淡路大震災が発生し、衝撃を受けると共に自分にも将来何かできることはないかと強く感じました。後で考えてみても、自分自身の考え方に大きく影響を与えた出来事でした。

その後も全国的に大きな規模の自然災害が多く発生しています。卒業後、縁あって佐賀におりますので、平成 17 年の福岡西方沖地震や平成 28 年熊本地震、2 年前の九州北部豪雨の記憶が鮮明です。

中でも熊本地震については強く記憶に残っています。夜 9 時半頃、自宅で携帯電話から緊急警報が鳴り、次の瞬間激しい揺れを感じました。揺れと共に自宅が歪まないか心配になるくらい大きなきしむ音がしました。この時、インフラ（水道）関係の現職に就いていましたが、瞬間的に事の重大さが感じられ、緊張が走りました。学生という立場だった阪神淡路大震災の時とは大きく違う感覚でした。

職場全体で現地熊本での被災地支援に取り組むことになり、私も被災地域において、拠点給水地点での応急給水等の作業にあたりました。住民の方々から感謝の言葉をいただき、何より嬉しく感じましたが、支援というより現地で貴重な経験をさせていただいたという感覚の方が強く、多くのことを学ぶことができました。

そういったことを経験する度に学科で学んだことを誇りに思うし、責任も感じます。上水道の設計等の仕事をしていますが、今後も社会に貢献する気持ちを忘れず取り組みたいと思います。

大学での講義は興味深いものばかりでしたが、その内容は私にとっては難しく、簡単に理解できないことも多かったように思います。4 年生の時は水理学研究室に在籍し、卒業論文は防災管理を目的として、嘉瀬川が氾濫した場合を想定した氾濫域拡大の時間的シミュレ

ーションを行いました。大串先生より研究の意義を示していただき、また数々のご助言を受け、何とか卒論完成に至ったことを感謝しております。

また同じ研究室の院生 3 人の先輩方にも強力なサポートをいただきました。挫けそうな時、度々奢っていただいた南門付近自販機のコーヒー、あの癒しの味が今でも忘れられません。同級生の 2 人とは励まし合いながら、明るく共に最後まで研究に取り組むことができました。大串先生を中心とした研究室での日々はとても有意義で充実していたし、あれ程貴重な時間は他にないと思います。

振り返るとやはり当時に戻りたい、もっと深く学びたいという気持ちになります。そういった意味で学ぶ機会に恵まれている学生の方々を羨ましく思うし、また時間を大切にして是非自分の目標に向かって邁進してほしいと思います。

末筆ながら、充実した学びの場である本学科の今後更なる発展と、卒業生の方々の御活躍を心より祈念いたします。



写真説明 学士 4 年生時、理工学部同級生有志で卒業式の前にお祝いで集まった際のものの

土木工学科設立 50 周年に寄せて — 振り返れば、都市計画へ。 —

パシフィックコンサルタンツ株式会社

伊東 博史

2003 年度 博士前期課程 修了

土木工学科設立 50 周年、誠におめでとうございます。

私は、1998 年に当時の都市工学科に入学しました。学籍番号は 98T。卒業後は公務員になり橋や道路に関わる仕事をするのかなと、そんな漠然とした将来を描きながらの入学でした。

初めて降り立った佐賀平野。どこまでも続く平地、格子状の街並み、縦横無尽に走る水路やクリーク、段差が気になる道路、人の高さを遥かに超える有明海の堤防など、坂のまち・港のまち長崎出身の私にとっては驚きの連続でした。ただ、今ではそれは、佐賀平野の土木やまちを学ぶ上で大切な気づきだったのかもしれない。



大学時代の生活はといえば、講義は一応まじめに、アルバイトはほどほどに、暇があれば友達と北山や唐津へドライブに出かけたり、ファミリーレストランに集合したり、もちろん飲みにも行くような、そんな生活を送っていたかなと思います。そのような中でも、漠然としていた将来の方向性が徐々に定まり、都市計画に関わる仕事をしたいと強く思うようになりました。都市計画について質問があり、後にご指導いただくことになる外尾一則先生の教官室の扉をたたいたのは 2 年生の終わり頃だったのでしょうか。

4 年生になり、外尾研究室に配属されました。その頃はまだ就職は公務員志望だったわけですが、描いていた将来がここで大きく変化しはじめます。外尾先生に「大学院に興味はありますか？ 今年から推薦制度も始まるから、ぜひ挑戦してみないか？」と声をかけていただいたのです。どのくらい悩んだか記憶が定かではないですが、恐らくあまり悩むことなく大学院への進学を決心したのではないかと思います。今考えるとぞっとしますが。

3 年間の研究室生活では、ゼミ活動のほか、メンバーでバーベキューをしたり、学術交流で韓国に行ったり、2002 年の FIFA サッカーワールドカップ日韓大会の観戦に行ったりしました。なかでも、4 年生の時に開かれた 5 日間の公開講座で調査結果を発表したことは、貴重な経験となりました。

研究テーマは、都市計画マスタープランと住民参加についてでした。大学院を出て 15 年

以上経ちますが、現在も都市計画マスタープランの策定や市民参加の企画・運営の仕事に携わっており、当時の経験が生かされています。また、外尾先生の研究室では、具体的な研究課題は学生自ら考えることを基本にしていましたが、自ら課題を見つけ、その解決方法を根拠を持って論理的に導くという経験は、今でも大いに役立っていると実感しています。

大学院を修了し、多少紆余曲折はあったものの、公務員ではなく、コンサルタントに就職しました。2015 年までは福岡にある九州支社で、交通社会実験、都市計画、景観計画、観光振興など、まちづくりに関する業務に幅広く携わってきました。2016 年 5 月に東京へ異動してからは、首都圏の都市計画や大規模ターミナル駅周辺のまちづくりのほか、海外の都市開発に関する業務などに、所属部門を超えて携わっています。

九州を離れている現在、大学の OB/OG と会う機会は少なくなっていますが、それでも、東京にいる研究室の OB/OG と時々顔を合わせたり、また、研究室の OB/OG が上京したときや年末年始に九州に帰省した際にもみんなで集まったりして、近況報告や昔話に花を咲かせています。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、最近は人と会うこともままならないですが、また皆様とお会いできる日を心待ちにしています。

最後に、土木工学科ご関係の皆様のご健勝と益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。



FIFA ワールドカップ観戦（2002 年 大分）



秋葉原にて（左から外尾先生、永家氏、西氏、伊東、2018 年）

土木工学科設立 50 周年に寄せて

大分工業高等専門学校 都市・環境工学科 永家 忠司

卒業年度：2003 年

修了年度（博士前期課程）：2005 年

修了年度（博士後期課程）：2008 年

この度は、佐賀大学理工学部土木工学科の設立 50 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。この寄稿文を執筆することを大変光栄に思います。

さて、私が佐賀大学に在学、勤務したのは平成 10 年から平成 24 年の 14 年間になります。人生の約 3 分の 1 という非常に長期の時間を過ごした経験が今の私を形成しているといっても過言ではありません。ただ、時間が経つと記憶が随分とあいまいになってしまいました。当時のことを思い出しつつ振り返りたいと思います。

学部時代は入学当初から勉学に心が向かず、どちらかというと部活動やアルバイトに精を出すような不真面目な学生でしたが、現在の方向性を形付けたのは学部 4 年次に外尾・葛研究室への配属でした。当時の研究室は十数人という大所帯であり、その中の一人として周囲に刺激を受けていたことを思い出します。卒業研究のテーマは提示された候補から一つを選ぶ方式であり、研究の中間報告を夏合宿で発表することになっていました。そのテーマは自分に向いていなかったのか中間報告ではまともな発表ができず、周囲が順調に進んでいるのを肌で感じ非常に焦ることとなり、よほど内容が酷かったのか、または行き詰まっているのを察したのか、その合宿の帰りに外尾先生から私にはそのテーマが合っていないことを理由に変更することを提案されました。今思えばそのことが現在の私に至る切っ掛けだったように思います。今でもそのことが私の一つの柱となっています。10 月に入りテーマを変更しお世辞にもいい出来ではないものの結果的に無事仕上げることで、修士課程へと進学することができました。その後の研究室での活動も大変充実したもので、研究室に集まったメンバーでなんとなく開かれる飲み会や、夜遅くまでくだらない話をだらだらとしていたことを思い出します。そんな中、その後の進路について漠然としか考えておらず、まだ就職氷河期が続いていたことも起因し自身の今後について悩んでいたところ、外尾先生から博士課程に進学することを勧められました。なぜ他に優秀な人がいるのに私なのだろうと少し疑心暗鬼になりつつも、先輩として猪八重さん（現 佐賀大学理工学科准教授）がいたことも一つの理由として博士課程に進学することを決めました。猪八重さんが研究室での頼りになる兄貴分という認識は、これまで関わってきた研究室のメンバーの共通する認識ではないかと思います。二人で居酒屋にいったときは五合瓶の芋焼酎を注文し、私の人生相談を聞いてもらいつつ、飲みきったらお開きにするということもよくありました。こ

れからもぜひ頼りにさせてください。その後、様々なプレッシャーに耐えつつ、頭に十円禿をつくりながらも何とか博士号の学位をとった後、低平地研究センターにポスドクとして所属することになりました。このように研究室配属後、外尾先生とは約10年間の長期にわたり大変お世話になり、研究面だけではなく研究者としての生き方も教わりました。よく食事に連れて行って頂き、話を聞くその時間が今となっては非常に懐かしく思います。

さて、学生時代の成績その他とても優秀とは言えない私ですが、現在、高専で教員として日々を過ごしています。これからも大学での経験・思い出を活かしつつ教育・研究に励んでいきます。こうして振り返ると非常に濃厚な大学生活であり、多くの人に支えられながら今の自分があるのだと改めて実感することができました。

末筆ながら、佐賀大学理工学科都市基盤工学コースおよび建築環境デザインコースの一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

土木工学科設立50周年を祝して

佐賀大学理工学部都市工学科 中村和博 2003年卒業

佐賀大学理工学部土木工学科設立50周年おめでとうございます。

心よりお祝い申し上げます。

私は1999年に佐賀大学理工学部都市工学科に入学し、大学4年時の卒業研究では大串先生の水理系研究室で学ばせていただきました。

卒業研究は大雨時、低平地で浸水常襲地帯であった六角川・牛津川流域に着目し、「空中三角測量を利用した六角川流域のバーチャル3D解析」を行いました。

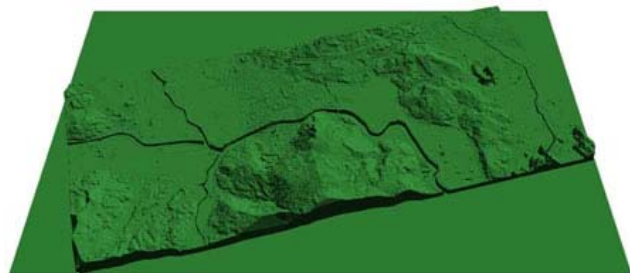
空中三角測量とは複数の航空写真を使用する測量で、重なり合う部分の既知位置情報数点を用いてコンピューターによる測量を行い詳細な地形や地盤標高データを得られるもので、得られた地形データをバーチャル3D化し氾濫シミュレーションを行うという研究をしました。

昭和23年当時の復元と平成14年の詳細な地形データ取得を目標に作業を進め、分からない時は大串先生や野口さん、諸先輩方に助けてもらい無事完成させる事ができました。大変お世話になりました。

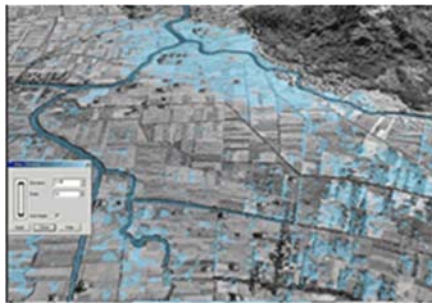
同じ研修室で相棒だった酒見君と夜遅くまでパソコンに向かい、データ収集・解析をした事や、有明海の水質調査の為に渡辺研究室と大串研究室のメンバーで船に乗って有明海に行った事など昨日のことの様に思い出されます。とても楽しく、和気あいあいとした雰囲気の中で学ばせていただきました。



航空写真



作成した地形データ



氾濫シミュレーション



仲間たち

卒業して18年ほど経ちますが、当時学んだ3Dの測量技術が現代のスタンダードになってきており、時代を先取りした研究をさせていただいた事、とても感謝しています。

佐賀大学を卒業し、プレストレストコンクリートの橋梁の施工管理を行う仕事に就いていますが、佐賀大学の後輩も入社し、さまざまな職種で活躍してくれています。

大串先生、今年で還暦おめでとうございます。いつも後輩に熱心なご指導ありがとうございます。今後もこれまで以上の熱いご指導をよろしくお願いします。お体には十分ご自愛ください。

今後の佐賀大学のご発展と皆さまのご活躍を祈念しております。

卒論で学んだことと現在の状況

所属機関名 当時の所属ゼミ : 丹羽研究室
現在の職場 : 高岡市役所 都市創造部 営繕課

氏名 中原 拓哉

卒業年度 平成 13 年度 理工学部都市工学科卒業
修了年度 平成 15 年度 工学系研究科博士前期課程都市工学専攻修了

この度は、土木工学科設立 50 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。50 年という長い間、本学科発展のためにご尽力いただいた方々の偉業に感謝するとともに、卒業生として大変誇りに思います。

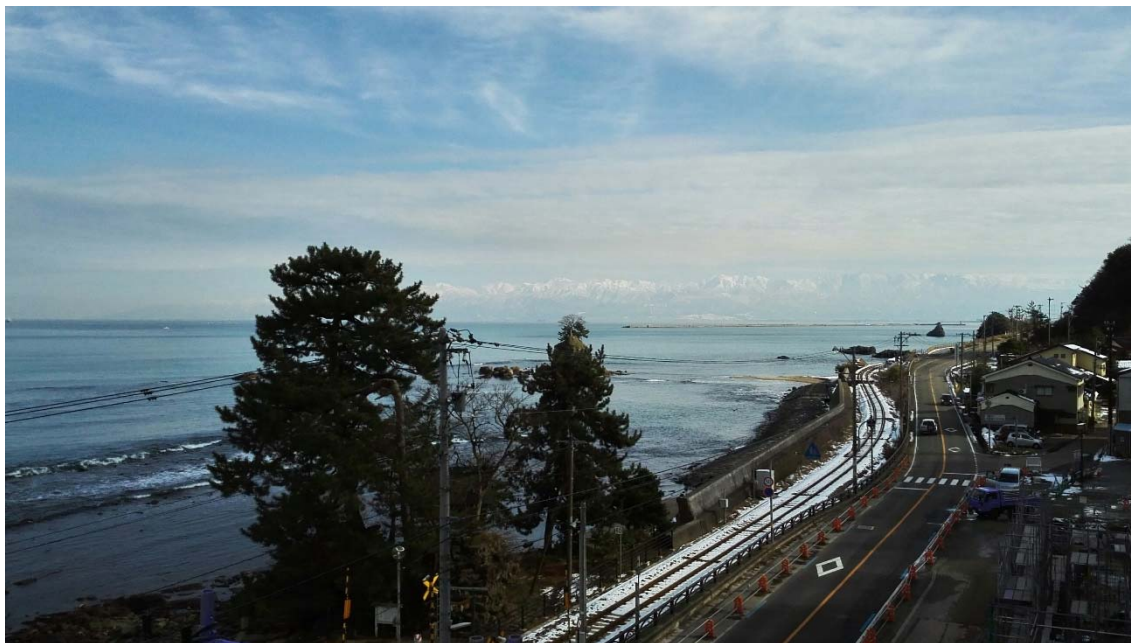
私が佐賀大学に在学したのは平成 10 年から 15 年の 6 年間です。私の出身は富山県で、現在も富山に住んでおります。大学を選ぶときに「建築の学べる国立大学」にこだわっていたため、佐賀大学を受験しました。こだわって入学した割には、勉学に励んだわけでもなく、何かに打ち込んだわけでもなく、テレビゲーム、麻雀、アルバイトばかりしていました。これはこれで人間関係が築け、社会勉強にもなり、いい思い出なのですが、大学の講義はなおざりになっていました。そんな底辺の学生でしたが、ゼミで取り組んだ卒業論文は思い出に残っています。今回はそのことと、私の現状について少し触れさせていただきます。

卒論を通じて学んだことは「客観的な事実を積み上げて自分の考えを証明する」ということです。卒論では「集落が市街化する過程についての研究」に取り組み、地図の分析めいたことばかりやっていました。なかなか自分が思っていると通りの結論が出ず、最後は数字の操作に躍起になっていたのを覚えています。稚拙なことをしていたと思うのですが、意外とこの経験は仕事でも役に立ちました。社会に出ると自分の考えを通す際に、誰が見ても納得できる事実を味方につけておく必要があります。卒論でやったことが無駄ではなかったと実感できました。今でも結論の根拠となる資料などを作っていると卒論のことを思い出します。これも当時熱心に指導してくださった先生方やゼミのメンバーのおかげです。本当にありがとうございました。

現在、私は市役所の建築職として工事監督の仕事をしています。ゼミでへこたれないよう鍛えていただいたおかげで、元気に頑張れています。下の写真は今までで一番しんどかった現場の建物の屋上から撮ったものです。この日は現場が少しでも早く進むように屋上の除雪をしていました。「富山湾と、そこに浮かぶように見える立山連峰」がこの地域でみられる絶景で、しんどい現場でしたが景色は綺麗でした。屋上には一般の方は上がれないので、現場に携わった人間の特権だと思います。今では電線もなく、もう

少し低い視点ですがもっと綺麗な景色がみられます。建物の名前は「道の駅雨晴」です。富山県に来られたときは是非お立ち寄りになってください。

最後になりましたが、佐賀大学の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



新築中の「道の駅雨晴」の屋上からの景色 平成 30 年 2 月撮影

先生・仲間を支えられた研究室での思い出

所属機関名：都市工学科 低平地研究センター 荒木・山西研究室

氏名：古賀 康之

卒業・修了年度：2004年度卒業・2006年度修了

この度は、土木工学科の設立 50 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

さて、私が在学致したのは平成 13 年から学部生としての 4 年間と平成 17 年から院生としての 2 年間の計 6 年間になります。修了からすでに 15 年も経過しており、時間の流れの速さを感じてしまいます。

当時は、都市工学科という名称であり、土木工学科と建設工学科が統合されて出来た学科であることから、「土木も建築も両方学べる場所だな」と感じながら入学した記憶があります。

在学中 6 年間で、学業・プライベート含め多くの経験をさせて頂きましたが、その中でも研究室での 3 年間は特に様々な思い出が残っています。

ちょうどその頃、有明海の諫早湾干拓事業による潮受け堤防の閉め切り後に養殖海苔の不作などが発生し、全国的なニュースになった時期でした。親戚が海苔の養殖業を営んでいることもあり、衝撃的なニュースであったと記憶しています。

そして、私の研究課題も有明海の干潟を対象としたものでした。研究エリアであった七浦海岸（干潟）は、干満の差が大きく、満潮時は海の中です。そして、潮の満ち引きは待ってくれないので、干潟の状態で調査できるタイミングはかなり限定されていました。潮が迫ってくる中、潟スキーに乗って逃げかえることも何度もありました。

また、少し沖に櫓を立て、自動昇降する計測器を設置して調査することもあり、その際は、船やボートに乗って櫓に行っていました。ある時、大型の台風が接近している中で、船に乗って計測器回収に向かったときは、命の危険を感じました。

自然を相手にした研究でしたので、自然の厳しさや偉大さにも触れることができ、貴重な経験であったと今だからこそ感じます。

そして、研究室の先生はじめ研究生皆で取り組んでいたからこそ、心折れずに乗り切れたと感じています。

未筆ながら、理工学科都市基盤工学コース・建築環境デザインコースの一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



2007年2月撮影

研究室の同級生4人の写真

低平地研究センターの文字の入ったパーカーを



2006年11月撮影

研究エリアの佐賀県鹿島市七浦海岸にて

渦スキーマに乗って干潟の泥を採取。

研究室の皆で協力して、現地調査から実験室での分析まで

学生生活を振り返って

中島 大斗 始良市役所（鹿児島県）
2011 年度卒業・2013 年度修了

土木工学科設立 50 周年、誠におめでとうございます。

私は 2008 年度に都市工学科に入学し、大学院までの 6 年間で佐賀大学で過ごしました。

学部時代、某教授が、「なぜ、日本の大学生は勉強をしないのか？」ということを追求めた結果、詰め込み教育と社会人の間に挟まれた大学生は「人生の夏休みなのだ」という結論に至ったとおっしゃっていました。その言葉に納得と感銘を受け、大学生生活を謳歌したもの、ギリギリまで単位取得に苦しみました(笑)。しかしながら、勉強の捉え方が変わったのも学部時代でした。授業で公式を導き出す過程や、研究で未知の分野を追求めしていく中で、勉強が目的から知識を得る手段に変わりました。勉強をする意味を見出すと苦手だった分野も楽しく学ぶことができました。もっと知りたい、追求めしたいという思いが強くなり、大学院進学を選びました。

学部 3 年後期からは大串研究室に所属し、修士課程を終えるまで研究に没頭しました。没頭できることが楽しく、研究室に住んでいるのかと勘違いするくらい入り浸っていました。

研究室時代を思い返して、一番印象に残っているのは卒業論文です。提出間際になると、連日、研究室のメンバーと共に泊まり込み、必死に論文を作り上げたのを覚えています。それまで提出してきたレポートや宿題とは比べものにならない量のものを仕上げなければならず、どう仕上げたら良いか悩みました。さらに、答えがあるか分からないものに対して答えを自分で作り出さないといけないという未知の作業にも苦戦しました。他のメンバーも同様に、期限内に論文を完成できるかという焦りや不安、また、連日の徹夜による疲れや苛立ちなど、さまざまな気持ちが入り交じり、研究室内は殺伐とした雰囲気でした。どうにか体裁を整え、みんな揃って提出できたときは安堵感と同時に激戦を共に闘った一体感も生まれたように思えました。提出後、ゴミ袋いっぱい詰められたカップ麺やお菓子の袋、あちらこちらで死んだように眠る学生たちなど、緊張から解放された光景は今でも鮮明に思い出されます。そんな必死の思いで乗り切った卒業論文ですが、社会に出てみると、卒業論文以上の量を求められる仕事は多々ありました。卒業論文は学生から社会人に気持ちを切り替える良い訓練の場なのだろうと思っています(笑)。

その他にも、国内外で学会発表、企業や官公庁の活動参加など、学生のうちから多くの経験をさせていただきました。特に、修士 2 年生のときに大串先生と二人で行ったロンドンでの学会発表は大きな経験の一つです。私にとって初めて行く外国で、つたない英語で研究発表したり、イギリスの現地視察をしたりなど、とても貴重な経験をさせていただきました。海外旅行につきもののトラブルも多々ありましたが、今となっては良い思い出です。

大学生活はあっという間に終わった一方で、とても濃密な時間を過ごすことができました。これも、大串先生をはじめ、都市工学科に携わる方々のおかげだと思っております。誠に感謝申し上げます。理工学科の今後ますますの発展を心から願っております。



卒論発表後（2012年2月）



大串研究室集合写真（2013年3月）

土木工学科創設 50 周年を迎えられ、心からお祝いを申し上げます。

私は高校のときに建築家が設計した住宅に住む住人目線でのテレビの特集に影響を受け、地元である本校の都市工学科を選び、建築都市デザインコースを志望しました。在学することとなった時期は、建築都市デザインコースが創設された初年度でもあり、本コースとしての先輩のいない環境の中で自分たちがこの先どう学んでいけばよいのか、期待と不安も抱えながら、講義や実習に取り組んでいたように感じます、そのような環境だからこそ、友人と学外での建築イベントに積極的に参加し、他大学の学生との交流を図り情報を得たり、設計事務所へのバイト等をしたりと前のめりに活動でき充実した毎日を送れたのだと思っております。自分達が関わり始めた建築イベントを在校生が引き継ぎ、現在でも関わり続けてもらえてることを嬉しく感じています。

新設されたコースであり、先生方におかれても、何かと試行錯誤の中でのご指導をいただくこととなったのではないかと思います、親身なってご助言もいただくなど、充実した大学生活を送ることが出来ました。特に学部3年時に着任され、所属させて頂いた研究室の平瀬さんには大学院を卒業して早9年が経とうとしておりますが、変わらぬお付き合いを頂き感謝しております。平瀬さんからは、建築の可能性と面白さを十二分に教えて頂きました。現在でも公私共に建築を楽しみ続けていれているのは、大学時代平瀬さんから建築を学ぶことが出来たからだと思っております。

都市工学科での勉学は決して楽なものではありませんでしたが、密度も濃くとても充実感のある4年間（大学院も含むと6年間）で、研究室の仲間と夜な夜な語り尽くし挑んだコンペやプロポ、またゼミ旅行などほかにも思い出は尽きないものがあります。在学中、建築設計の授業での最終公表会に著名な建築家の方々を招いていただき、プレゼンさせていただけたことは特に思い出深いものとなっています。切磋琢磨し合えるかけがえのない友人や後輩たちに出会えたこと、振り返れば、この友人や後輩たちが居たからこそ学業や研究活動、学生生活がとても充実したものになったと実感しています。進むべき方向に迷いを感じた時などに的確なアドバイスをくださる先生方、メンバーに囲まれ、周りの研究に打ち込む姿勢に刺激を受けながら日々過ごせたことはとても幸せなことであり、自分の人生に今でも大きな影響を与えています。都市工学科で学んだことは、現在の仕事に活かされているとつくづく感じます。

地方で建築をどう考えていくか、建築がまちや人々にどう影響を与えていくのか、大学時代から考えていることを、今後ずっと考え続けていき、まちに還元していきたいと思っております。

最後に、研究指導だけでなく様々な経験をさせて下さった先生方、仲間に感謝を申し上げ、また都市工学科のさらなる発展と卒業生、在校生の皆さんのご活躍をお祈りし、お祝いの言葉とさせていただきます。

新しい世界との出会い

第一工業大学

工学部 建築デザイン学科 助教

副田 和哉

学部（2013 年度卒業）・博士課程前期（2015 年度修了）・博士課程後期（2018 年度単位取得
退学）

（平瀬研究室）

土木工学科設立 50 周年、心よりお祝い申し上げます。

私は 2010 年に都市工学科に入学し、学部・博士課程前期・博士課程後期と 9 年間に在籍していました。この 9 年間で多くのヒト（先生方や同級生・先輩・後輩）に出会い、たくさんの豊かなモノ（建築や都市）に触れ、ワクワクするコト（設計・研究活動、ワークショップ）を経験させて頂きました。この 9 年間は私の人生にとっても大きな転換期であり、新しい世界が開かれたトキ（居場所）でもありました。私の思想の根底には、都市工学科での学び・経験が大きく影響しています。

講義の思い出

学部生の頃は日々の講義そのものが、私にとって新しい世界でした。現代建築概論で建築の扉を大きく開いて頂き、アーバンデザインでは都市の見方・楽しみ方を教わりました。建築史では建築に取り組む上での心がけや陰翳礼讃などの文学作品を懇々と語って頂いたのも印象的でした。他にも挙げればキリがありませんが、日々新しい世界の発見に満ちていました。2020 年から大学に着任し、私も学生に対して上記の講義を教えています。講義をしながらいつも思い出すのは学部生の頃のこうした刺激的な体験です。私自身が先生方に頂いた刺激を学生に与えられているのか、反芻しながら日々の講義に取り組んでいます。

学外での活動

学部生から院生の頃まで、大学とは異なる新しい世界（海外や国内の色々な地方）に連れて行って頂いたのも何よりの経験です。初めて国際ワークショップに参加した韓国、レールウェイ・マーケットやフローティング・マーケットなどローカルなエリアを探索したタイ、今も続けている研究の対象モデルとなったイタリア（ヴェネチア）、建築のみならず様々な近代の萌芽に触れることができたオーストリア（ウィーン）など、多くの豊かな体験をさせて頂いたなと感謝しています。また身近な佐賀県内でも、修士論文でテーマにした佐賀のクリーク集落や、毎年国際ワークショップをしていた鹿島の肥前浜、地域の方々に良くして頂いた基山、デザイン監修させて頂いた有田、地域構想に関わらせて頂いた小城の牛津など、様々なヒト・モノ・コトに出会わせて頂きました。他にも、熊本地震の被災地に建設された仮設住宅地の環境

改善活動を他の九州の建築系大学研究室と協働で行なったり、敷地調査と称して研究室のメンバーと山登りに連れていってもらったり、楽しい思い出ばかりです。国内外問わず、本当にたくさん場所（世界）に連れていって頂いたと思います。こうした様々な場所・地方での活動や体験が、私の現在の活動の根底にあり、今も地方で建築活動に取り組む際、原風景になっています。

コンペ・プロポへの参加

また印象深く残っているのが、建築コンペ・プロポへの参加です。初めてコンペに入選した時、同級生と跳び上がってハイタッチしたことを昨日のことように覚えています。また落選通知が来る度にうな垂れて愚痴を言い合ったり、研究室や製図室で良く喧嘩していたのも懐かしい思い出です。学生時代は本当に多くのコンペ・プロポに参加しました。（今更ながら先生方にはこうした機会を意図的につくって頂いたと感じています。）あの時の楽しさや悔しさ、ワクワク感がベースとなって、今の活動に繋がっています。

こうして学生時代を振り返ってみると、本当に密度の濃い9年間であり、新しい世界との出会いの連続でした。今回このような機会を与えて頂き、誠にありがとうございました。

最後になりますが、設立50周年記念事業に尽力された関係者の方々へ御礼を申し上げますとともに、母校である佐賀大学そして理工学科都市基盤工学コース・建築環境デザインコースのますますの発展を祈念致します。

後藤研究室での思い出

佐賀大学大学院工学系研究科

PARK JAEYOB

卒業年度：平成 29 年度

この度は、土木工学科の設立 50 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

私は 2016 年から 2 年間、大学院の建築環境デザインコースに在籍し、現在は同大学院工学系研究科博士後期課程(システム創成科学専攻)に進学、まもなく卒業というところにあります。来日当時は、日本語が下手で、日本文化もよく分からなかったため、コミュニケーションの難しさがあって先生との会話で意味の伝達がよくありませんでした。そのたびに研究室の仲間たちにアドバイスを頂きました。時には、研究室の仲間たちと一緒に現場に訪問したことも多かったと覚えています。一方で、調査結果を論文にしたためること等、経験のないことの連続で、試行錯誤する日々でした。特に、使っている言葉が正しい表現なのかの判断が大変でした。でも、論文を書き上げることができたのは、先生方のみならず、研究室の仲間や後輩達の協力があったからだと思っています。

研究室活動の約 5 年間、後藤隆太郎先生のお世話になりました。毎週のゼミを通じて、4 年生たちや仲間達がどのような研究テーマを選び、どのように進めるのか学ぶことができ、自分もの研究をどのように進めるべきなのかを考えることができました。特に、先生が研究の進行度合いや学生の理解度によって助言されていたことは、韓国では経験がなく、新鮮で印象的でした。

また、毎年研究室で九州のいろんな地域や町を 1 泊 2 日で現場踏査しました。学期初にお互いぎこちない時に一緒に旅行し、研究室仲間たちと親しくなることができました。また有名な建築物を自分の目で見て先生の説明を聞いたことも記憶に残ります。

私の研究テーマは、「移住者に着目した中山間地域の空き家活用と地域活性化に関する研究」で、衰退する中山間地域の様々な問題を解決するために、集落住民が移住者を受け入れる手段として空き家を活用していました。特に、移住者たちは、既存住民が注目してなかった集落の未活用資源を活用し、新しい種類の訪問者を誘致していることを発見することができました。

最後になりますが、お世話になりました先生方に感謝申し上げますとともに、土木工学科（および理工学科都市基盤工学コース・建築環境デザインコース）の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致します。



後藤先生との最初の出会い（2015 年）



地域住民と集落の問題に対する議論（2016 年）

佐賀で学んだ6年間と、これから。

山田 章人

- ・大学院卒業年：2018年3月（H29年度）
- ・大学卒業年：2016年3月（H27年度）
- ・卒業研究室名：平瀬研究室
- ・NASCA（有限会社ナスカー級建築士事務所） / スタッフ / 建築意匠設計

私は現在、東京都内の設計事務所に勤務し、建築意匠設計の分野で仕事をしています。都市工学科（建築都市デザインコース）の学生として、大学院卒業までの6年間で過ごしました。この6年間で、新しく作られていく建築が、まちに対してどうあるべきか考える大切さを学びました。

建築を志した理由が「デザインがしたいから」だった私にとって、まちと建築の関わりなど想像しえない事でした。しかし、佐賀にはたくさんの特有な文化や、歴史的な建物が残っています。本学科では、それらまちの文化・歴史と関わりを持つ授業が多く展開されており、各分野の先生に、それぞれの観点から佐賀について教えて頂いたことで、様々な視点から、まちが持つ魅力や大切さに気付くことができました。そこで私は、建築を設計するという仕事は、建てられる建築自身が「きっかけ」となり、そこから、場所の持つ文化や魅力、人々の生活を「創造」する事だと思ったのです。中でも鹿島市の酒蔵通りに数日間泊まり込みで開かれる国際ワークショップは、特別な経験となりました。昼間はまち中を歩き、このまちに何が必要かを考え、夜は保存建築物に宿泊し、地域の方々と食を共にする。そして、考えも言葉も違う多国籍の学生が、一つの文化について魅力を「創造」するために真剣に議論し提案を作り上げました。この数日間は、今でも私にとって掛け替えのない経験です。

時間は流れ、東京で社会人となった今、私はまた鹿島の文化・歴史を前に鹿島市の新たな市民会館の設計を行っています。しかし今回は、「これから実際に建ち上がる建築」として。会社の担当者としてではありますが、多くを学んだ佐賀でまた、市民の方々と協同しながら、まちの晴れ舞台の設計に携われることは、この上ない幸せです。

側から見れば、新米の小さな一歩かもしれませんが、私にとってこれは、人生の大きな第1歩です。様々な議論されてきたイメージが、実際に立体物として目の前に建ち上がろうとしているこの建築を介して、まちの「これから」に寄り添いながら、先生方への感謝を忘れず、建築人生の第一歩を踏み出します。

○写真の内容

新鹿島市民会館設計の市民ワークショップの際に用いた設計案の模型写真です。模型や図面囲みながら、市民の方々にたくさんの意見を頂きました。熱のこもった議論がなされ、これから建つ市民会館に対する町全体の期待感を肌で感じることができました。



佐賀大学で過ごした 6 年間

工学系研究科都市工学専攻三島・瀧上研究室

住田裕美

修了年度：2018 年

世の中が目まぐるしく変化していく中、土木工学科が無事に設立 50 周年を迎えられましたこと心よりお喜び申し上げます。また、このような節目に記念誌への寄稿と自らの学生生活を振り返る機会を与えていただき誠に感謝致します。

「どうしよう、大学入試試験全然出来んやった...もう佐賀に来ることは無いんやな」と人目もはばからず泣きながら大学構内を歩いたことが昨日のことに思い出されます。結果は無事合格。縁もゆかりもない佐賀の地でしたが気づけば 6 年もの時間を過ごしていました。今回は特に思い出に残る研究活動と修士で過ごした 2 年間について記したいと思います。

まず、研究活動について。私は佐賀県鹿島市にある重要伝統的建造物群保存地区である肥前浜宿で空き家を利活用したまちづくりの研究を行っていました。肥前浜宿は私の恩師である三島教授が長年研究されている町でもあります。研究は「肥前浜宿の NPO 法人の人たちに布団を用意してもらってるから、数日泊まりで住民にヒアリングとアンケート調査ね！NPO 法人の人にもお願いしてるし卒業した研究室の先輩にも一人で寝泊まりして研究した女の子がいるから大丈夫大丈夫！」と三島教授に言われたところから始まりました。全く知らない土地の歴史的建造物に一人で寝泊まりする心細さから泊まりがけでの調査は結局 1 泊で終了。翌日からは通いで調査となりました。こんな笑い話もあり徐々に肥前浜宿の人たちの輪に溶け込んでいきました。興味で選んだ研究室でしたが、いつしか肥前浜宿やまちの人たちのために研究したいと思うようになり、最終的にはその研究成果をまちの人たちに伝え喜んでもらえたことが私の宝物となっています。

次に、修士で過ごした 2 年間について。修士では自身の研究の他にも、研究室や同期との制作活動、国際学会での発表、国際ワークショップへの参加、設計事務所でのアルバイトなど様々な機会を与えていただき挑戦した 2 年間でもありました。自分の世界が広がる楽しさもありましたが、挑戦することで壁にぶつかり悩むことも多くありました。そんな時話を聞いてくれたり、議論してくれたりしたのが同期や研究室の仲間、先生方でした。社会人になった今でも私にとってかけがえのない存在となっています。

最後に、多くの人たちに支えられ過ごした佐賀大学での 6 年間は人生における原石であると考えています。今後歩む人生の中で原石を輝かせていける様、日々精進していきたいと思っています。

今後も再編により土木工学科の名は変わっていくかもしれませんが、50 年続いてきた土木工学科が今後も飛躍していくことを祈念致します。



土木工学科設立 50 周年に寄せて「大学生生活の 6 年間を振り返って」

佐賀県県土整備部都市計画課 川原 航

2019 年度修了

この度は土木工学科設立 50 周年記念誌の発刊、誠におめでとうございます。数多くの先輩方に並び、執筆させていただける機会を設けていただいた大串教授には大変感謝しております。大串教授には、学部 4 年生及び修士課程の間、大変お世話になり、海外論文発表等、人生においても貴重な経験となる機会を設けていただきました。寄稿文においては、主に大串研究室でのエピソードについて執筆させていただきます。

私は、2013 年 4 月に佐賀大学都市工学科に入学し、2017 年 3 月に卒業、2017 年 4 月に同大学院工学系研究科に入学し、2019 年 3 月に修了しました。その後、佐賀県庁に土木の技術職員として入庁し、2 年が経つところです。公務員としての業務は慣れないものが多いですが、大学 6 年間の経験があるおかげで、積極的に業務に取り組んでいます。

私が佐賀大学理工学部都市工学科に魅力を感じたのは、浪人中のことでした。都市工学というものを当時は深く知りませんでしたが、都市工学科がある大学は全国でも片手で数えるくらいしかないと聞き、珍しいもの好きの自分は、その希少性にひかれました。今思えば安直でしたが、大学時代の経験をできたのは、この安直さのおかげと思うとよかったです。

学部生の時はサークルにも入らず、授業を受けては即座に帰宅し、アルバイトに明け暮れておりました。飲食店のアルバイトをしておりましたが、接客の作法や簡単な調理技術など大学の講義では学べないことを学びました。今一人暮らしをしておりますが、自炊は難なくこなせておりますし、人と接する場面にも苦労したことはありません。人生において、どこかで身に付けたスキルというのは、いつか役に立つのだなと思いました。

学部 3 年生時は、建築コースで熱環境系の勉強をしておりましたが、せっかく土木も学べる学科を選んだのだから、と土木系の研究室を希望しました。その中でも特に興味深く、将来的に学んだことを活かす機会が多いと考え、希望させていただいたのが大串研究室でした。私は、大串研究室で研究されていたシミュレーションソフトを利用した氾濫解析に興味を持ちました。近年は、大雨による災害も多く、佐賀平野は慢性的な内水氾濫に悩まされておりますので、この分野の発展なくして、災害リスクの軽減はないなと考えていたのです。

研究室に配属されてからは、今まで建築を学んでいた頭を切り替え、水理学などを学ぶ日々になりました。座学もですが、大串教授は現場を見ることも大事という考えで、嘉瀬川の石井樋や県内のダム、筑後川へ引率していただき、水工学的観点から様々なことをお教えいただきました。また、夏季に催される複数の研究室合同の BBQ はとても楽しく、留学生と交流するよい機会でもありました。大串研究室では、社会性や人間性の成長もさせ

てくれました。

私は、筑後川の捷水路と旧蛇行部の治水や利水に関する研究をしておりましたが、それらの研究を発表する機会が幾度かございました。その中でも冒頭に記しました海外での発表はとても印象的でした。ベトナムでの学会でしたが、異国の地で英語による発表の難しさを体感しました。日ごろから留学生と会話する程度の英語では全然だめでしたし、また、異国の食文化にも触れることができ、今では、近所のベトナム料理屋が行きつけになっております。

土木工学科設立 50 年の長い歴史の一部に仲間入りできたことを非常に嬉しく感じております。併せて、佐賀大学理工学部都市工学科の皆様のご多幸と更なるご活躍をお祈り申し上げます。



国際学会での記念写真

この度は、土木工学科の設立 50 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

私は、2015 年から 4 年間、都市工学科の建築・都市デザインコースに在籍し、現在は同大学院の建築環境デザインコースに進学後、まもなく卒業というところにあります。学生時代を振り返ると、設計演習の授業と研究室での活動が、強く思い出に残っています。

設計演習において、特に先生方とのエスキスでは、文字通り、一人ひとりの作品に真剣に向き合い、数多くのアドバイスを頂きました。時には、議論に熱が入りすぎて、授業時間に収まらず、夜になることも多かったと覚えています。

同時に、自分のアイデアを形にすることや、それを相手に伝える難しさを感じたのも、この演習の授業でした。同じ課題に取り組む仲間の作品やプレゼンを参考にしながら、互いに協力しあい、高め合ったことを記憶しています。また、先輩方が残されたプレゼンボードや模型も、制作に取り組む上で大きな道標になりました。いずれにせよ、親身になって教えてくださった先生方や TA の先輩、切磋琢磨し合った仲間達のおかげで、設計演習の課題を乗り越えることが出来たと実感しています。

研究室での活動としては、4 年生から大学院へ進学後も含めた 3 年間、後藤隆太郎先生にお世話になりました。私の研究テーマは、「国営干拓地における居住地や屋敷の空間構成」で、居住地は土地の進展方向（陸から海の方）に規定されるのに対し、屋敷内の建物配置は絶対方位（南側を開く）に関係するため、特異的な街並み景観が生まれることを発見できました。

毎週のゼミを通じて、先生や先輩方、仲間達と和やかに、そして真剣に議論を深め（話が盛り上がり、脱線することも多々ありましたが）、ゼミ以外でも幾度となく相談に乗っていただいたおかげで、研究を形にすることが出来たと考えています。また、後藤先生には何度も現地調査に同行していただき、遠くは八代市の金剛干拓まで、一日中干拓地を巡ったことは、記憶に新しいです。

一方で、研究室に入ってから、現地でのヒアリングや、調査結果を論文にしたためることも等、経験のないことの連続で、試行錯誤する日々でした。特に、修士 2 年の時には、コロナ禍によって一時は大学への通学が制限され、農村集落への現地調査もはばかれる状況に直面しました。その中において、航空写真を用いた集落空間の分析など、自宅や大学内のできる新しい調査方法を模索しながら、何とか修士論文を完成させられたのも、今となっては良い経験になったと考えます（当初はリモートでのゼミに慣れず、苦労していたことも懐かしいです）。改めて、研究をまとめ上げることができたのは、先生方のみならず、研究室の仲間や先輩方、後輩達の協力があつたからだと感じています。

最後になりますが、お世話になりました先生方に感謝申し上げますとともに、土木工学科（および理工学科都市基盤工学コース・建築環境デザインコース）の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



干拓地集落での現地調査の様子（2020年8月）

退職して始めたこと

鬼塚 克忠

38 年間務めた佐賀大学を 65 歳で退職して早くも 13 年になります。最初の 5 年間は原 裕さん（佐賀大学大学院博士後期課程修了）が社長の日本建設技術（株）に勤務し、その後は年金暮らしを続けています。この間、始めたこと、夢中になっていることを三つ取り上げてみます。

山歩き

現職のころ、学生時代の体験にならって毎夏、研究室の学生さんたちと九重に登っていました。退職前から山歩きを始め、岩田達也さん（かつて土木工学科在籍）がリーダーのベースキャンプ（佐賀市内）の山行に参加していました。その後、「山と溪谷社」の登山ガイド「佐賀県の山」を片手に、独りで佐賀の山に登り始めました。佐賀 52 山の最後の山、武雄の御船山を松尾保成（昭和 59 年卒、）さんと登ったのは良い思い出です。

この 10 年近くは佐賀労山（佐賀勤労者山岳会）に入り、月に 1～2 回登っています。「勤労者」といってもメンバーのほとんどは「かつての勤労者」であり、若い人はほんのわずかです。今年 1 月は脊振峠に近い「金（かな）山」に 20 数人で、深い積雪の中アイゼンをはいて登りました。2 月には七山村の「浮嶽」「土坊（とんぼう）山」でしたが、低山なれども、急坂でこたえました。どちらの山歩きも女性が 2/3 と多く、皆さん元気で驚きます。80 人の労山メンバーの内、私より高齢者は 5 人ほどですが、全員強健です。

オルレも楽しいです。これは韓国の済州島でスタートした「山歩き」ですが、もともとは「狭く入り込んだ路地」を意味するハングル（済州島の方言）のようです。九州の各地にオルレのコースが設定されています。佐賀県でも武雄、嬉野、呼子などです。所要所に道案内のリボンや標識が取り付けられており、道を間違えることはありません。だいたい 12～13 km の距離で 5～6 時間を要します。高低差は数百 m あり、結構きついです。高千穂、霧島、島原などのオルレも歩きました。そしてオルレに似た国東の峰入りコース、これは昔修行僧が歩いた山道ですが、総距離 100km ほどあり、数年かけて踏破を目指しています。

時には独りで金立山（501m）を歩きます。緑陰の中を歩く時の爽快さとほどほどの緊張感がたまりません。単独登山は駄目といわれていますが、その魅力には勝てません。しかし他人に迷惑をかけることになってはいけなないので、一人登山はそろそろ終わりかなと考えます。

テニス

土木工学科がスタートして 10 年足らずの頃、当時院生だった清田勝さん（昭和 50 年卒）達とプール傍のプレハブで卓球を楽しんでおりました。そのうち全学的にテニスが盛んになり、テニスに転向した清田さんに勧められ、私もテニスのラケットを握ることになりました。土木棟のすぐ南にコートがあり、石川達夫先生をはじめ土木の先生方や研究室の学生さ

ん達とプレイに興じました。上手にならないうちに、念願の外国留学の機会を得て10か月海外に滞在し、帰国すると学内の雰囲気はがらりと変わっていました。ドクターコース（博士後期課程）設立のための業績づくりにみんな忙しく、テニスどころではなかったのです。

その後30年間テニスから遠ざかっていましたが、70才になって佐賀市のテニス教室参加をきっかけに再開しました。ラケットの握り方、振り方、サーブの仕方など基礎から学びました。山歩きで体力はある程度自信があったのですが、身体のいろんなところが痛くなり、一度は肉離れを起こしたこともあります。現在は週2〜3回県営コートや市営コートで仲間とプレイしています。佐賀大学のかつての、先生方や職員の方々もおられ、みなさんと楽しくやっております。家では動きが鈍い私ですが、なぜかコートではボールを追って走ることができます。不思議です。ダブルスの相棒にあまり迷惑をかけない程度には上達しましたが、克服すべき課題は限りなくたくさんあります。

フルート

以前からモーツァルトのクラリネット協奏曲やフルート協奏曲は聴いておりましたが、不器用な私がフルートを吹くことになるとは思ってもみませんでした。実は、我が家に娘が20年も前に買ったままのフルートがあったのです。笛はボケ防止に良いと妻から言われており、またずいぶん以前に研究室の金子孝治さん（昭和51年卒）から、笛は持ち運びが簡単でどこでも吹けますよ、と聞かされていました。そこでフルートを手に取り、吹いてみると意外にも音が出たのです。以前学科の懇親会で高田弘先生が尺八を吹かれたことがあります。フルートも尺八も初心者にはふつう音が出ないのですが、どういうわけか音が出ました。

図書館でフルートの本借りてきて練習を始めました。そのうち、どうにか「マイウエイ」を吹けるようになりました。しかし、妻からは「うるさい」「音がおかしい」といわれ、基本からちゃんと学ぶ必要があると思い、鹿島まで月2回フルート教室に参加することになりました。受講生は5名、私以外はみんな女性で、フルートの経験者です。先生は娘と同じ年頃の女性で、彼女が吹いた音を初めて耳にしたときは、美しい音色に感動を覚えました。笛の持ち方、指の使い方、息の出し方などすべて基本から注意、指導を受けました。しかし、いったんついた癖はなかなか直りません。

現在は鍋島で同じく月2回、個人レッスンを受けています。テキストの課題曲を吹いて合格すれば次の曲に進みます。家では吹けても若い女の先生の前ではうまくいきません。吹き始めてもう7年ぐらいになりますが、こんなに難しいとは思いませんでした。

横笛のフルートは低音、中音、高音の3オクターブの音を出すことができます。指の位置はほぼ同じで息の方向と強さ・速さだけでコントロールしなければなりません。3オクターブのファ#以上の音がきれいにせず毎日苦闘しています。高音を出すにはお腹から息を出す必要があります。縦笛のクラリネットやサックスはフルートとは違い、高音を出すには専用のキイを押せばよいようです。

練習すればするほど下手なことが分かり、なかなか人前で披露することができません。
「これだけ練習しても上手にならないのなら、止めたら」と妻からたびたびいわれますが、
吹くのは結構楽しいものです。ほんの少しずつ上達していると信じ、周りへの騒音とならぬ
よう気にしながら、毎日吹いています。

(2021, 2, 26)

土木工学科設立 50 周年おめでとうございます。学科設立は昭和 45（1970）年ですが、1 回生の卒業生にとって、もう一つ大事な記念すべき年は、卒業した昭和 49（1974）年となります。どこの大学でも、同窓会の集まりを入学年次か卒業年次で区別して命名しますが、土木工学科では、楠志会というものがあります。これは、1 回生の卒業年が 1974 年であり、その 74（ナンシ）と県木「くすのき」との語呂合わせで楠志会が生まれたと聞いたことがあります。したがって、楠志会の卒業生の皆さんにとって大事な 50 周年はもう少し先になりそうです。

ここで個人的なことで恐縮ですが、私が佐賀大学に着任したのは、昭和 59（1984）年です。着任直前の 3 月の送別会では、「コガさん。あの佐賀に行くの？ あの「おしん」の佐賀だよ！」と慰めか励ましか分からないメッセージを頂戴しました。当時の朝ドラは、1983 年～1984 年の 1 年間と長く、「おしん」の視聴率が極めて高い（最高視聴率 62.9%）ことも影響したものと思います。さらには、「佐賀大学には、強面の先生（先輩）達がいるから大変ヨ～ 頑張ってね」とトドメのお言葉を頂き、戦々恐々の心理状態で着任することになりました。当時、建設工学科棟は建設中でありしばらくの間、土木棟に居候させて頂くことになりました。土木棟の事務室でコーヒー飲みながら、夕方になればビールを飲み（何故か事務室の冷蔵庫にビールがあったような。無くて大学前の旭屋さんに速攻で届けてもらえる良い時代でした。）、教育や学科将来について熱く語る先生方とお話する機会を得ることができました。そのため、新しい建設棟に引っ越す頃には、過去に聞いた先輩先生達への伝聞情報は全く根拠のないデマであったことを実感しました。皆さんも風評には呉々も惑わされないようにしましょう。

土木工学科の 50 年を振り返ると様々なことがあったと思います。兄弟学科であった建設工学科と統合し都市工学科へ組織改組、大学院については博士課程の新設などです。その間、防災というキーワードで地域・国際貢献への寄与を目的として、土木・建設工学科のスタッフを核とした低平地防災研究センターが平成 3（1991）年に新設され、学科の組織も充実しました。しかし、平成 15（2003）年の国立大学の独法化を機に学内の雰囲気は他の国立大学と同様に一変します。これら一連の変遷過程について、詳しく述べることは、その立場にふさわしい方達にお任せしたいと思いますが、平成 30（2018）年に低平地沿岸海域研究センター（旧低平地防災研究センター）の姿は消えることになりました。地球温暖化、異常気象、海面上昇など今でも通用する時宣を得たテーマをコアにしつつ、地域計画、歴史文化まで幅広く活動してきたセンターであり、本学の個性を主張できる看板がなくなったことは本当に残念です。センターの DNA は、低平地研究会、国際低平地研究会に引き継がれていますので、今後に期待したいと思います。

新型コロナなど、現在の状況を考えると「しょんぼりしないで、前を向いて、将来に向か

って進んで行きましょう！」と言いたいのですが、しばらくは我慢。
とはいえ、楠志会誕生後の 50 才のころには、きっと笑って話せる機会が来ると信じていま
す。それまで皆さんのご健勝とご活躍をお祈り致します。

都市工学科時代一コース制への再編

佐賀大学名誉教授 外尾一則

1997 年の改組により都市工学科が誕生し、新設の社会システム講座の教授として、私は 1998 年 10 月から 2014 年 3 月までの約 15 年間都市工学科に在籍しました。50 年という節目を迎えられた学科の歴史の中で後半部分に位置する都市工学科時代に実施された学科再編について、都市工学科誕生による環境設計講座の拡充と社会システム講座の新設を經由して、学科再編へのステップが加速していく経緯を当事者の一人として振り返りたいと思います。

大規模な学科ゆえの悩み

着任後に、新米教授として都市工学科の悩みを知ることになります。

都市工学科は土木と建設という類似の 2 学科が統合して作られた経緯から、教員は旧土木分野（土質・地盤工学、構造・コンクリート工学、水理・河川工学）が圧倒的に多く（他には環境衛生、環境設計、社会システムの各分野に少数）、都市工学という学科の呼称から見れば専門分野が偏り、ウイングの幅が小さい教員構成でした。また土木・建設系分野に限定して卒業生を輩出せざるを得ないため、就職市場においては外部との競争力の低下につながり、むしろ一学年 100 名弱という大所帯のスケールメリットを活かせていないという悩みを抱えていました。さらに、受験生の減少が近い将来現実になることに対して、当時の教育組織が他大学との厳しい競争に対応できるかが重い課題でした。

教授の会合が時々開かれ、時には学外の寿司屋などでも話し合いの場が持たれましたが、方向性を決めることを急ぐというよりも問題の深刻さを慎重に教授間で共有していくことに主眼が置かれていたようです。やがて、特徴のある教育組織に改組・改編することが課題に据えられ、土木及び建設系を軸としてきた歴史を損なわず、かつ 2 学科並みのスケールメリットを失うことなく、その上で学生・卒業生、行政や産業界等の地域社会に魅力を与え、他大学との競争力を兼ね備える都市工学科の再創造を目指すことになります。

都市工学科の再編一コース制導入

専攻長を担当した頃は学科再編作業の大詰めの日頃でした。

二つの学科やグループに組織分割することなく、ひとつの学科の下で複数の教育カリキュラムを提供する組織づくりが開始されます。大きすぎる学生規模の細分化と学生の指向性を明確にする教育方法として学生のグループ化を焦点に、学生が自主的に講義を選択するクラスター制か、あるいは 2 年次に所属先を分けるコース制かが検討されました。次にグループの数が検討され、運営の簡易さと実現可能性の観点から 2 つのコース制（都市環境基盤コース、建築・都市デザインコース）が決定されました。

建築・都市デザインコースには担当教員数が少なく、中長期的には潤沢な土木系教員を漸次減少し建築系教員を増加することが課題となりますが、建築・都市デザインコースのカリキュラムを成立させるため、いくつかの非常措置が取られました。まず建築及び都市デザイ

ンの根幹となる少数のデザイン系教員の講義数の負担が極端に大きくならざるを得ませんでした。また建築系構造分野の専任教員が不在であることに対して、土木系の構造・コンクリート分野教員の卓越した能力と大きな犠牲によって建築系構造分野の講義が提供され、問題が解消されました。さらに社会システム系教員がふたつのコースの中間領域として両コースの共通科目を担当し、カリキュラムの効率化が図られました。このような尋常ではない犠牲的努力や工夫によって建築系分野の教員不足が補われ、2006 年 4 月コース制が実現しました。

実現に至るまでには学科内でも様々な意見の対立・葛藤があり、また私の知らないところに悲劇やドラマが隠されているかも知れません。また数十年先の地域社会の変貌や大学教育組織のあり方を展望し得ていたかという疑問も残ります。しかし、2つの異質な教育コースを提供する教育組織への衣替えが短期間に成功できたことがまさに離れ業であり、その大きな要因のひとつとして、現在振り返ると多くの教員の中に共通する強い危機意識があったからに違いないと思います。

その後

建築・都市デザインコースには新しい教員が続々と加わり、2010 年頃には教員の陣容がほぼ完成形に近づき、学部生はもとより大学院の修了生を輩出するまでに至ります。コース制が軌道に乗ってきているという認識が都市工学科の多くの教員の中で定着し始めた時、建築・都市デザインコース唯一の教授としてコースの企画及び設置から屋台骨を背負われてきた丹羽教授が急逝されるというショックに見舞われ、残された都市工学科の教員たちは無念の思いを深くしました。その年及び翌年に、三島教授（デザイン系）と小島教授（建築環境系）の二人の新しい教授が誕生し、二人を中心に若い准教授等を混じえた建築・都市デザインコースとして継承されていきます。

都市工学科が備えていたスケールメリットと多様性は既に過去が存在かも知れませんが、それらの伝統・遺伝子を持つ創造的教育・研究集団として、都市工学部門が益々発展を遂げられることを願っています。

渡邊訓甫佐賀大学名誉教授のご逝去に際して

令和 2 年 10 月 12 日、佐賀大学名誉教授渡邊訓甫先生がご逝去されました。コロナ禍の中での感染予防のため、葬儀は近親者のみで執り行われました。このたび佐賀大学土木工学科設立 50 周年記念に際しまして、学科創設の頃よりご尽力いただいた渡邊先生のご冥福をお祈りするとともに、そのご功績の一部を記念誌の紙面をお借りしてご紹介させていただきます。

渡邊訓甫先生は、昭和 43 年 3 月に九州大学工学部水工土木学科を卒業後、昭和 47 年 4 月、佐賀大学理工学部講師として着任されました。その後、昭和 50 年 4 月に同助教授に昇進され、水工学講座を担当されました。さらに平成 8 年 4 月に同教授に昇進され、平成 9 年 4 月の学科再編により都市工学科環境システム工学講座を担当され、平成 23 年 3 月 31 日をもって定年退職されました。

先生は、土木工学という幅広い学問の中でも特に応用水理学の分野でご研究を進めてられました。沖積河川の河床形態と抵抗則に関する研究や低平地開水路ネットワークの研究、植生水理に関する研究など多方面でご研究されてきました。特に河川の流砂のご研究では、九州大学の椿先生と共同で浮流砂の研究を進められ、掃流層と浮流領域の境界を与える浮流限界点や浮流砂量式に関する理論を提案されています。これらのご研究の業績が認められ、先生は平成 2 年、九州大学より「沖積流路の河床形態に関する研究」で工学博士の学位を授与されました。

平成 5 年から 6 年にかけて、先生は文部省在外研究によりアメリカ合衆国コロラド州立大学に留学されました。学位論文で完成された沖積流路の河床形態予測理論をもとに河川の流水抵抗を推定する手法を開発するため、コロラド州立大学のノーディン教授のもとで河床波に関する水路実験や実河川の膨大な測定データを整理され、河床波のスケール式の適合性を検討されました。河床形態に対応する流れの抵抗の推定は非常に重要で、地形が急峻で降水量の多い我国では山地からの流出土砂が卓越していることも相まって合理的な抵抗の算定方法は河川工学上非常に重要なテーマとなっており、渡邊先生のご研究は我国の河川工学の分野で高く評価されています。

また、教育の面でも先生は熱心に学生をご指導されてきており、時には厳しく時にはやさしく、また、常に学生自身にじっくり考えさせる教育方針を貫かれ、これまで多くの優秀な人材を社会に送り出されてきました。先生の研究室を巣立っていった学生は学部で 126 人、修士で 35 人に昇ります。このような教育研究の傍ら、海外研究機関との研究交流にも力を入れられ、エジプトのアレクサンドリア大学のナギイ先生を佐賀大学に招請され、共同研究や学生への教育を国際的なものに発展させられてきました。

学会活動としては、先生は土木学会、国際水理学協会、水文・水資源学会などに所属され、学会の委員会委員なども歴任されています。また、九州の各河川流域や沿岸域の防災や環境

に関する各種審議会や委員会の委員も多数務められ、地域の発展に大きく貢献して来られました。

また、先生は佐賀大学の組織への貢献も非常に大きく、平成9年の都市工学科スタートの時は初代学科長として大変な時期を乗り越えられ、また、理工学部教務委員長としていろいろな面に配慮された仕事をされました。さらにその後、理工学部評議員や学長補佐、総合企画室長など重要な職を務められてきました。平成22年には、学部長を補佐する立場として副学部長の職を務められ、第一期中期計画終了後の大学の評価や今後の大学の進むべき道を示されるなど、佐賀大学に対しても大きな貢献をされてきました。

以上のように、先生は39年の長きにわたり佐賀大学において教育研究に優れた業績をあげられ、大学や地域の発展に尽力されました。

あらためまして渡邊先生のご冥福をお祈り申し上げます。

文責 大串浩一郎（佐賀大学理工学部教授）

佐賀大学名誉教授 後藤茂男先生を偲んで

令和2年12月21日に、佐賀大学名誉教授の後藤茂男先生が逝去されました。ご葬儀は、福岡市内の斎場にて、家族葬というかたちでしめやかに執り行われました。ご冥福をお祈りしますとともに、この場をお借りしまして、簡単ではありますが、筆者の思い出なども交えながら、先生のご功績を振り返りたいと思います。

後藤茂男先生は、昭和30年3月に九州大学工学部土木工学科をご卒業後、株式会社宮地鐵工所に入社されました。同社では、主に吊橋や斜張橋などの超大橋設計業務に従事され、関門橋や瀬戸大橋などの超大型プロジェクトにおいて中心的な役割を担うなど、宮地鐵工所の技術部門のみならず日本を代表する橋梁設計技術者としての歩みを進めてこられました。また、民間技術者として活躍をされながらも、その業務の中から得られた数々の知見を学術論文として多数発表され、昭和44年には九州大学より工学博士の学位を取得するとともに、土木学会田中賞（論文部門）受賞という快挙を成し遂げられました。その後、日本構造技術株式会社の取締役社長を経て、昭和59年10月に佐賀大学理工学部建設工学科に教授として着任されました。同学科では、構造力学、橋梁工学などの授業科目を担当され、平成10年3月に定年退職されるまでの間、博士（工学）を3名、修士（工学）を12名輩出されました。

先生は、前述のように橋梁技術者として第一線で活躍される中で、当時の一つの大きな課題（難題？）であった吊橋などのケーブルの大変形問題を克服する過程から、独自の有限変形理論を確立されました。この「後藤理論」は、計算機技術が発展し始めた当時の構造解析の分野に大きなインパクトを与えました。中でも昭和50年の「接線剛性法による骨組構造物の大変形解析」（土木学会論文報告集）は、いまだに多くの論文で引用される“幾何学的非線形解析手法のバイブル”といっても過言ではありません。またそのほかにも、それまで難しいとされてきた開断面や多室断面を含む薄肉構造断面計算のためのせん断流理論を明解に説明するなど、橋梁設計全般にわたって今日の技術に繋がる多大な貢献をなされました。

佐賀大学着任後も、ケーブル解析法の発展形としての膜構造物のインフレ・デフレ解析や、石峯膜仮想剛性要素を用いた形状決定問題などに取り組まれたほか、3次元空間では四則演算が不可能な有限回転の合理的な計算手法を開発し、

これを宇宙構造物に転用可能なリングの畳み込み解析に応用するなど、精力的に研究を継続され顕著な業績を挙げられました。

また先生は、計算機性能の急速な発達に伴ってブラックボックス的乱用が目立つようになってきた有限要素法に対しては一貫して批判的な立場をとられてきました。西日本構造解析研究会における先生の退職記念講演論文「幾何学的非線形解析における有限要素法の功罪」では、有限要素法の拡張理論が幾何剛性中のせん断力項欠落などの不完全さを排除できないことを指摘したうえで、変位法の拡張理論である接線剛性法では、要素端に離散化された要素力と基準座標表示の節点力との間の釣合関係の非線形性を記述した幾何剛性が省略のない厳密なものになることを、具体的な計算例とともに示されました。

このように、近寄り難いほど輝かしい業績を残してこられた一方で、とても気さくで、誰にでも優しく、たまにおやじギャグが入るお茶目な人柄もあって、多くの学生から慕われていたことは皆さんご存じのとおりです。仕事を離れると、クラシック音楽や映画、これらを楽しむためのオーディオ機器の収集など、いわゆる「多趣味」であるだけでなく、それぞれへの造詣と知識が半端なく深く、スピーカーの回路図を自ら書いて自作してしまうほどの徹底ぶりでした。無類のグルメでもあられ、筆者もよく、井嶋先生や技術職員の川崎さんと共に、先生の愛車 Mark II に乗せていだたき、佐賀市内の美味しいお蕎麦屋さんや小城の鯉料理屋さんにお伴させていただきました。また、お食事をご一緒したときには「先週、女房とあそこに行ってね…」と頻繁に奥さまのことが話題に出てくる愛妻家でもありました。

思い出を書き始めると紙面が足りなくなってしまうのでこのあたりで筆を置かせていただきますが、留年を繰り返した劣等生であった筆者を拾い上げてくださり、本当にかわいがっていただきました。先生の教えを受ける天運に巡り合ったことは、筆者にとっては生涯一の幸せであったと感謝しております。改めて、ご冥福をお祈り申し上げます。

文責：85T609 帯屋洋之